

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

2017 年度
修 士 論 文

農村景観構成要素としての生垣の変遷と保全に関する研究
-館山市塩見地区を対象として-
The Transformation of Hedge as the Components of the
Traditional Rural Landscape and its Preservation
-A case Study of on Shiomi, Tateyama -

2018 年 1 月 22 日提出
指導教員 岡部 明子 教授

加 瀬 ひ か り
Hikari, Kase

目次

序章

0-1.はじめに	3
0-2.研究の背景	
0-2-1.農村景観の美しさ	4
0-2-2.農村景観の消失と保全	4
0-3-1.農村景観を構成する要素としての生垣	5
0-3.既往研究	5
0-3-1.生垣(屋敷林)に関する研究	5
0-3-2.農村景観の保全に関する研究	6
0-4.研究の目的・方法・本論の構成	
0-4-1.研究の目的	6
0-4-2.研究手法と構成	7

第 1 章 農村集落における住宅の囲い

1-1.本章の目的	13
1-2.住宅の囲いの発祥	
1-2-1.防護のための生垣 .	13
1-2-1.境界領域としての生垣 .	14
1-3.古代の生垣	
1-3-1.結界としての生垣	15
1-3-2.仕切りとしての生垣	15
1-3-3.目隠しとしての垣根	16
1-3-4.象徴としての垣根	16
1-4.中世の生垣	
1-4-1.防犯のための生垣	17
1-5.近世の生垣	
1-5-1.生業や暮らしのための生垣	17
1-5-2.鑑賞のための生垣	19
1-6.近代以降の生垣	19
1-7.小結	21

第2章 安房地域の「自然発生的集落」における生垣の立地特性

2-1.本章の目的	25
2-2.安房地域の概要	
2-2-1. 概要	25
2-2-2. 安房地域の風環境	25
2-2-3. 千葉県の樹「マキ」	27
2-3.集落の選定	
2-3-1. 集落の定義	27
2-4-1. 生垣の分布特性	28
2-4. 集落の類型化と生垣の変遷	
2-4-1. 集落の類型方法	31
2-4-2. 安房地域の自然発生的集落の立地	32
2-4-3. 集落ごとの生垣の分布状況	32
2-5. 生垣の立地特性	38
2-6. 館山市塩見区の位置づけと生垣の分布特性	38
2-7. 小括	39

第3章 千葉県館山市塩見地区における生垣の変遷

3-1.本章の目的	43
3-2.館山市塩見区の位置づけと生垣の分布特性	43
3-3.千葉県館山市塩見地区の概要	
3-3-1. 概要	43
3-3-2. 歴史	44
3-3-3. 人口動態	46
3-3-4. 集落空間の変遷	46
3-4.塩見区における生垣の変遷	
3-4-1. 古地図からみる生垣	55
3-4-2. 館山市塩見の伝統的民家の生垣	56
3-4-3. 新築住宅における住宅の囲いの変遷	56
3-4-4.生垣の分布変遷	59
3-5.集落空間の変容と生垣の変遷	62
3-6.小結	63

第4章 暮らしの変化と生垣の変遷

4-1.本章の目的	67
4-2.インタビュー調査について	67
4-3.生垣の機能と形状	
4-3-1. 防護	82
4-3-2. バッファ領域	82
4-3-3. 境界	82
4-3-4. 仕切り・目隠し	83
4-3-5. 資材調達・生業空間	83
4-4.生垣の変化が起こった時期	83
4-4-1. 生垣の維持管理の変遷	83
4-4-2. 維持管理の課題	84
4-4-3. 維持管理を続ける理由	84
4-5.生垣の変化が起こった時期	84
4-6.生垣景観の価値	86
4-6-1. 維持管理の課題	86
4-6-2. 維持管理を続ける理由	86
4-7.小括	

終章

5-2.結論	
5-3.今後の課題	90
5-4.謝辞	90

序章

序章

0-1. はじめに

私は初めて館山市を訪れたとき、住宅の四方を囲む高生垣が連なって独特の農村景観を形成していることにとても心惹かれた。個々の家の囲いは屋敷の独自性を保つと同時に、その連なりが地域固有の農村景観を形成している。個人の所有物であり、極めて機能的に理由でつくられた生垣が連なり、秩序を保って集落全体の景観を作り上げていることに農村景観の奥深さを感じた。

本研究は、伝統的な農村景観は「美しい景観を残そう」として守られて残ってきたものではなく、必要なものが必要に応じて姿カタチを変えつつも、「残るべくして残ってきた」ものであるという観点から、農村景観を構成する要素について再考するものである。



図 0-1 館山市の生垣景観
(館山市正木)



図 0-2 伝統的な農村住宅の構え
(館山市正木)

0-2. 研究の背景

0-2-1. 農村景観の美しさ

農村景観は長期にわたる農村住民の生活、生産活動を通じた人間と自然環境の関わりから生み出されるものである。樋口忠彦¹⁾は、自然に対して受け身で依存的に、自然をうまく利用した環境の改変を行ってきた結果形成された「生きられる景観」こそが「美しい景観」であると述べた。またこうした生きられる景観について、英国の心理学者であるアップルトン²⁾は「危険が回避できる場」、すなわち、「隠れ場と眺望がある場」を持つ景観を人間が美しいと感じるとする考え方を提唱している。生きられる景観とは生物学的な棲息地と同一視される。つまり、人間が太古の昔から好んで暮らしてきた心地よい空間にこそ、人が美しさを感じる根幹があると言う。

農村景観の美しさは、人々がどのように自然環境と関わり、どのように農村景観を形成してきたのか、その背景を捉えてこそ初めて理解されるものだと言えよう。

「美しい景観」とは、人が快適に生存するために環境を改変した結果生み出された「生きられた景観」である。美しい景観はその時代の生活や生産の必要に応じ、人々と自然環境との持続的な関係性を前提として形成されてきた。

0-2-2. 農村景観の消失と保全

近年、流通の広域化や製品の規格化などにより地域の個性の喪失や画一化が進み、自然環境との関わりの中で長い時間をかけて育まれてきた農村景観はその悪化を余儀なくされている。こうした中で、目標となる景観の理想型を設定し、そこからの改変を最小化してできる限り現状を維持しようとする「保全」という考えが景観計画の主流になってきた。しかしこうした保全のあり方は、時代とともに変化しながら長い時間をかけて現在の形を形成してきたはずの農村景観を、ある理想型のもとに凍結し変化のプロセスを止めてしまうことになる。また、農村集落におけるこうした凍結が、景観としての価値が十分に理解されないままに行われたのでは、農村景観の表層だけを懐古的に保管する“モデルハウス”のようになりかねない。

「景観というのは見方である」とは、文化地理学者のオギュスタン・ベルク³⁾の言葉である。ベルクは、「景観を見る側の人間」と「見られる対象としての景観」の相互の関係性が景観を決定づけるとした。「景観を見る側」が「見られる対象」とどのような関係を築くのかは時代によって変わる。人はその都度時代の変化に合わせた新たな「見方」を発見し続けることで、今日まで美しい景観を残し続けることができたのだろう。

現代において景観の価値を理解しそれを残していこうとするならば、表象の保全にとどまることなく、その「見方」、すなわち姿カタチや機能の背後にある、環境と人との生きた関係性の維持にまで立ち戻って考える必要がある。

「景観」は「見方」であり、人は、その都度時代の変化に合わせた新たな「見方」を発見し続けることで、今日まで美しい景観を残し続けてきた。

農村景観の保全は、姿カタチや機能の背後にある、環境と人との生きた関係性の保全にまで立ち戻って考えるとき初めて展望される。

0-2-3. 農村景観を構成する要素としての生垣

本研究では、農村景観を構成する要素として住宅の囲いに用いられる生垣に着目した。まず、本研究における生垣の定義について述べる。生垣の定義は、古代からの垣根の変遷について研究した額田(1984)⁴⁾と同様に「生きている木を用いた垣根」とし、形状や刈り込みの有無は問わないものとした。またこの生垣は特別な記載のない限り、厚みを持った樹林形状のもの(屋敷林)も含む広義の意味で用いる。一般的に、「屋敷林」と「生垣」はその形状や機能から厳密には区別されるが、元を辿るとその発祥は同じものであるとする見方がある。⁵⁾これについては1章で詳しく述べる。

住宅の囲いは外敵や自然の驚異から暮らしや住宅を守り、個人の私的領域を示すという最も単純かつ基本的な機能を持つ。内部の建築が時代とともに建て変わり多様化しても、住宅の囲いとしての生垣は現代までその形状を残し、伝統的な集落景観を形成してきた。このように長らく当たり前に存在してきた生垣は、近年ではブロック塀やフェンス等に代替されたり、囲い自体を設けない住宅が増加することにより姿を消し、農村景観の統一感が失われつつある。こうした背景を踏まえ、生垣の農村景観を今後も適切なかたちで継承していくために、今一度、その景観がどのような経緯で生まれ、どのように変化し、そして今なぜ継承が困難になってきているのかを明らかにする必要があると考えた。

0-3. 既往研究

0-3-1. 生垣(屋敷林)に関する研究

生垣(屋敷林)に関する既往研究としては、その歴史的変遷について明らかにした額田(1984)⁴⁾や飛田(1999)⁶⁾の研究がある。これについては第1章で主要な参考文献と

して詳しく触れる。また生垣(屋敷林)の防災や防塵機能などの環境性能に着目した齋藤 他(1990)⁷⁾や新田 (1948)⁸⁾の研究があるが、これは人が先人の知恵や経験に基づいてなんとなく把握されていた生垣の機能を定量的調査により明らかにし、生垣整備や継承の重要性を再度指摘するものである。

また特定の地域における生垣(屋敷林)の分布特性を調査研究した柳井 他(1994)⁹⁾や近江(1992)¹⁰⁾の研究、緑被と建物による民家の敷地内空間構成に着目し、屋敷林の維持される民家と喪失された民家の特性を解明した小森 他(2013)¹¹⁾の研究などが代表的である。

これらはいずれも限定された一地域においての実態調査や、その変遷を明らかにする事例調査が中心で、生垣が気候風土によって違ったかたちをとり、機能を変化させつつも維持されてきたのか、その変遷を解明しきれていない。

0-3-2. 農村景観の保全に関する研究

農村景観の保全に関する研究は、農村における具体的な人の暮らしと景観変容との因果関係を明らかにしたもの(麻生 他・2009)¹²⁾、滋賀県近江八幡の水郷景観および埼玉県比企丘陵の里山景観を事例に、その景観の変遷から農村景観の保全のあり方に言及しているもの(横張 他・2009)¹³⁾がある。

これらの研究は農村空間が時の流れの中でどのように住民生活の変化を受け入れつつ変容を遂げてきたのかを明らかにするもので、農村景観が集落の変容や暮らしの変化と結びついて変容を遂げてきたとする着眼は、本研究にも共通する。

しかし本研究では、ある地域において複数の要素の調和の結果に生み出された景観そのものの変容を追うのではなく、景観構成要素としての生垣自体に主眼を置く。形成された景観の変容に留まらず、生垣自体がどのように変化し、美しい農村景観を構成してきたのか、そしてそれがどのように継承されてきたのかを明らかにすることに、この研究の意義がある。

0-4. 研究の目的・方法・本論の構成

0-4-1. 研究の目的

美しい農村景観は、生きるための空間を形成していくうえで、景観を構成する各要素が造形的に調和して生まれるものである。人々はその都度、時代の変化に合わせた

新たな「見方」を発見し続けることで、今日まで美しい景観を継承してきた。しかしながら近年、伝統的な農村景観の存続は危ぶまれ、その維持や整備に対する社会的欲求は高まりつつある。こうした中で、今後も人と自然環境との持続可能な関係性を保ち、美しい農村景観の継承を展望するためにも、人がその「見方」をどのように更新してきたのかを知る必要があると考えた。

具体的には、農村景観を構成する要素として、住宅の囲いとしての生垣に着目した。本研究ではまず、農村景観の重要な要素である生垣がどのような条件のもとで生まれ、どのような変化を経て今日まで残ってきたのか、その変遷を明らかにする。そして生垣の現状と人の生活との関わりから、今後の生垣景観継承のための知見を得ることを目的とする。

0-4-2. 研究手法と構成

本論文は序章、本編四章、終章の全六章から成る。全体の構成は図 0-3 に示す通りである。以下研究の流れを示す。

[1章 農村集落における住宅の囲いの変遷]

住宅の囲いの発祥とその変遷を整理した上で、農村集落においての住宅の囲いとしての生垣が元来どのようなものであったのかを明確にし、生垣の機能が時代や暮らしの変化の中でどのように変化してきたのかを文献レビューより整理する。

[2章 安房地域の「自然発生的集落」における生垣の立地特性]

農村景観を構成する要素としてマキの生垣の連なりが景観を形成している農村集落の多い安房地域を対象とし、生垣景観の現況調査を行い、生垣の分布とその形態の違いを明らかにする。その要因を集落の地形立地、集落形態や生業等による生垣の出現状況の違いに着目し、生垣景観を有する集落の地理的・社会的特徴を「生垣の立地特性」としてまとめる。

[3章 千葉県館山市塩見区における生垣の変遷]

2章で明らかにした集落ごとの生垣の立地特性を、千葉県館山市塩見区を具体的な事例として更に詳しく見ていく。集落空間の変容が住宅の囲いである生垣にどのような影響を与えたかを、生垣の分布の変化から明らかにする。

[4章 暮らしの変化と生垣の変遷]

集落に暮らす人々が生垣とどのように関わってきたかを現地調査やヒアリング調査から明らかにする。1～3章までの生垣の機能や集落空間の変容をふまえ、人との暮らしの中で生垣の機能がどのように変遷してきたか、今日まで生垣の景観を継承してきたものが何なのかを考察する。

[終章 「生きられた空間」としての生垣景観の継承]

1章～4章で明らかになった、農村集落における住宅の囲いとしての生垣を人と自然環境の持続的な関わりの中で位置づけ、その景観が現在まで継承されてきた理由を総合的に考察する。その上で生垣景観保全の現状に言及し、今後の生垣景観継承のあり方について展望する。

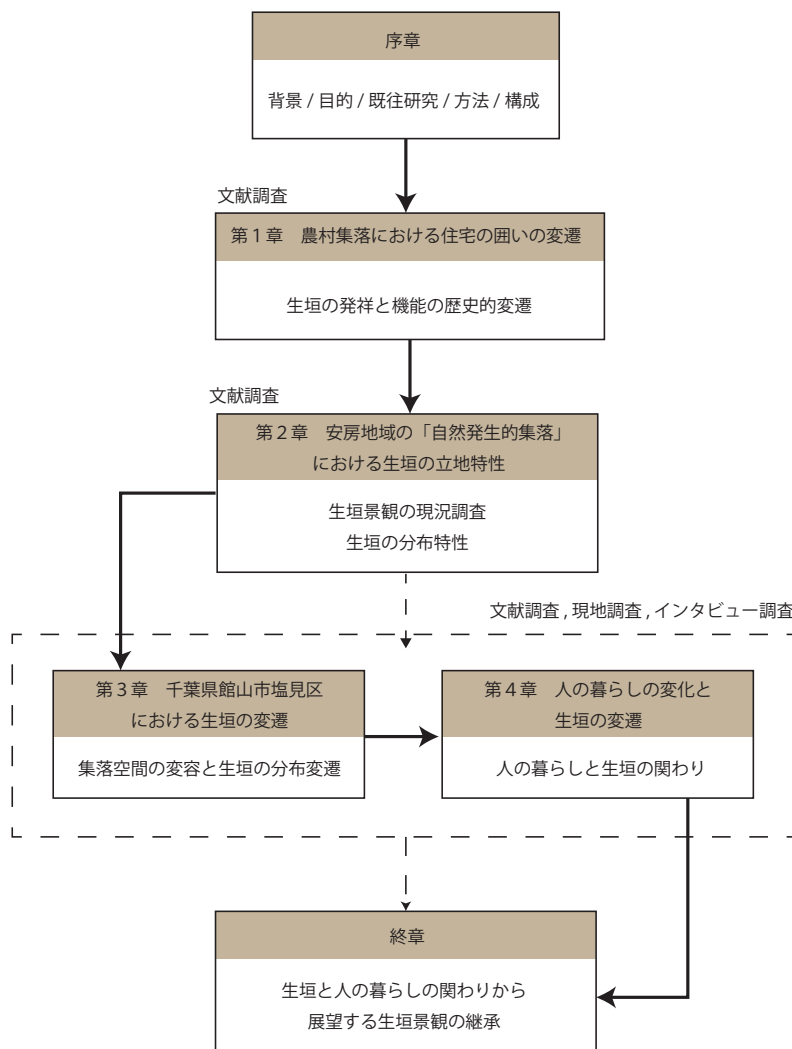


図 0-3 本論文の構成

参考文献

- (1) 樋口忠彦(1993)「日本の景観 ふるさとの原型」, 筑摩書房
- (2) ジェイ・アップルトン(2005)「景観の経験 景観の美について」, 法政大学出版局
- (3) オギュスタン・ベルク(1990)「日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代」, 講談社
- (4) 額田巖(1984)「垣根-ものと人間の文化史」, 財団法人法政大学出版局
- (5) 元木靖(2011)「関東平野の屋敷林研究ノート -『地域環境』学のための一里塚として-」
- (6) 飛田範夫(1999)「日本の生垣の歴史的変遷について」
- (7) 齋藤庸平 他(1990)「屋敷林の防災機能に関する実証的研究」
- (8) 新田伸三(1948)「生垣の防塵効果について」
- (9) 柳井重人 他(1994)「千葉市における生垣の分布特性に関する研究」
- (10) 近江慶光 他(1992)「茨城県取手市における生垣等の困障実態に関する研究」
- (11) 小森美咲 他(2013)「屋敷林の変容と民家の空間構成に関する研究」
- (12) 麻生美希 他(2009)「農村景観における空間構成の変遷と景観保全の課題 -岐阜県大野郡白川村萩町を対象として-」
- (13) 横張真 他(2009)「農山村における文化的景観の動態保全」

第 1 章

農村集落における住宅の囲い

第1章 農村集落における生垣の変遷

1-1. 本章の目的

前述のように、農村景観はその時代の生活や生産の必要に応じ、人々と自然環境との持続的な関係性の中で長い時間をかけて形成されるものである。本章では、農村景観の重要な構成要素である生垣が、元来どのような目的で発生し、どのように継承されて今日の伝統的な農村景観を構成するに至ったのか。その発祥と歴史的変遷について整理することを目的とした。

1-2. 住宅の囲いの発祥

1-2-1. 防護のための生垣

住宅の囲いは、古来より暮らしや財産を外敵・自然の脅威等から保護し、個人の私的領域を示すために機能的に存在してきた。こうした囲いは「垣」や「垣根」といい、生垣や柵といった透過性のあるものだけでなく壁などの不透過のものも含む。

『われわれの先祖は、自然の暴威から、自分たちの生活をいかに守るかに、永い間の工夫と努力とを続けてきた・・・そのために自然の材料である木・竹・土・石などを利用して、自分の生活を守るための障蔽物をつくり上げた』額田(1984)

額田の記述にみるように、垣根には、最も基本的な機能のひとつとして、自然の脅威から暮らしや財産を守る「防災」の機能がある。生垣のこうした機能は、まだ人が狩猟生活を営んでいた頃、住処の洞窟の入り口などを樹木や草木の蔓などで覆って風よけや野獣よけとしたことに、その原型を見ることもできよう。また額田は、防災の垣についてこう述べている。

『防災の垣をつくるということは、一方では、人間が原始の心をもちながら、自然から遠ざかることであり、他方では人間が自然と調和(順応)して生存するための手段をつくり出すことであった。・・・農村では冬の北風を、海岸地方では海からの強風を防ぐために、石垣を築いたり、樹を植えて防風用にしたが、それがしだいに屋敷垣として定着するようになった。』額田(1984)

自由に土地が手に入れられた時代には、居住地は生活や営農の利便のために最も条件のよい場所が選ばれた。しかし開拓が進み、荒野や湿地など暮らすのに条件の悪い土地に集落を営まねばなくなると、気候風土やその他の自然条件に対応するため様々な工夫が必要とされた。その一つが、防風など防災のために垣根を設けることであったという。

このように、垣根は人が快適に安心して暮らせる住処を獲得するために、自然環境と調和(順応)して生み出されたものであり、こうした垣根のある景観こそが美しい「生きられる景観」であったと言えよう。

1・2・2. 境界領域としての生垣

上述したとおり、垣根の持つ最も基本的な機能は自然や外敵からの防護の機能であると考えられるが、垣根にはもう一つ重要な機能として、空間を区切る「境界」の機能がある。境界としての生垣の発祥は、額田の以下の記述がその考察の参考になろう。

『垣の最初の形としては、生きた木がそのまま用いられたようである。つまり、木の密生した林を伐り拓いて、境界線のところの木だけを残すという方法である。たとえば榊という木は「境木」という意味であったというし、垣内という語には「垣内柳」など、植物の名前がつけられている例からみると、生垣が境界の原型であったことが想像させる。』額田(1984)

人々の生活が狩猟生活から農耕生活へ移行した当初は、土地利用の区画によって発生したそれぞれの境は、隣接する土地のいずれにも帰属しない、幅のある虚空の地帯が境界の緩衝地となっていたという。それは例えば草地であったり、開拓から取り残された樹林帯などの微高地であったりした。こうした面的な境界領域は、それぞれの土地利用の拡大を受け止めて変化・伸縮するバッファ領域であり、土地利用を区切る物理的な障壁としての役割を果たしていた。このようにして形成された微高地はいわば天然の生垣であり、「境界を示す」ために存在していたと言える。こうした垣根は住宅の囲いとして用いられたというよりむしろ、農地と居住地の境界、集落の範囲を示す境として用いられたのが始めであったようである。それが次第に土地利用の効率化が目指されるようになると、点や線の境界に置き換えられるようになっていった。

1-3. 古代の生垣

1-3-1. 結界としての生垣

身を守るための物理的障壁として生まれた垣根であるが、日本におけるその発展は西洋とは著しく異なり、独自の文化を育んでいったようである。牧畜社会の西洋では、垣根は動物や家畜が自由に往来できない実体的で即物的なものでなくてはならず、財産の境界を標示するためにはなくてはならないものであった。一方、米作社会の日本では共同体としての意識が強く、所有地の違うごとに柵で囲う必要はなかったため、こうした垣根はあまり発展しなかった。

伊藤ていじ¹⁾によると、原始の垣根を除き日本において最初に垣根の文化が現れたのは神社であったという。古代の日本人の樹木観は、自己の生命の永世を願って常緑樹を強く讃仰し、神社で神聖な場所を区画する垣根などに常緑樹の垣根を用いたようである。生垣は外部からのけがれをさえぎり、神のための聖域を清浄に保つ「結界」であった。こうした結界のための生垣は、かならずしも物的に越えられない障害物である必要はなく、その意味(心のけじめ)が暗示されればそれで十分であった。結界に限られた聖域の中では、その樹を切ることはもちろん木の葉を拾うことさえ禁止され、安易な出入りも憚られたという。古代の宮殿ではこうした神社のつくりを真似て、王の神聖な住まいを生垣で囲うようになった。

1-3-2. 仕切りとしての生垣

万葉集によると、奈良時代頃から生垣が貴族の邸宅にも用いられるようになった。平安時代には寝殿造りの庭園の一部に生垣が用いられ、自然の柔らかい感じのものを「仕切り」として利用していた。この頃になると、垣根の種類も大幅に増え、状況に合わせて様々な形状のものを使いわけていたようである。

垣のうちで最も長い歴史を持っているものは柴垣(樹木の枝などを束ねて立てた垣)であるとされるが、これは家を防備するのが目的ではなく、風を遮るとか、ちょっとした仕切りや目隠しにするなどの目的で、比較的身分の低い人の住宅の垣に用いられた。

こうした垣はいずれも竹木や柴を利用した簡単なもので、向こう側を常に意識し、超えようと思えば超えられるような強度・高さの垣であった。



図 1-1 貴族の邸宅の柴垣
【土佐光起筆「源氏物語画帖」より図引用】

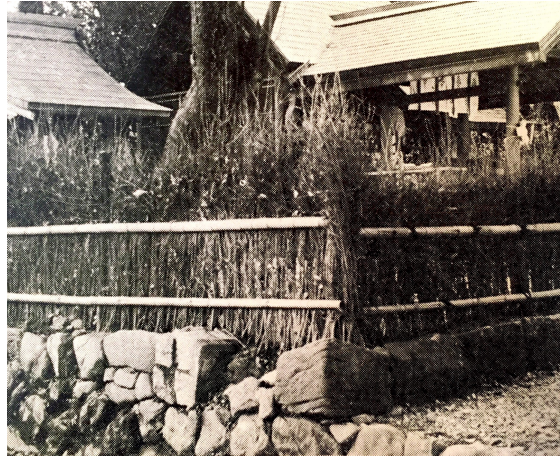


図 1-2 神社の小柴垣（京都・野宮神社）
【額田(1984)「垣根」より図引用】

1-3-3. 目隠しとしての垣根

簡単な目隠しの機能をもつ生垣は、すでに上記で述べたように奈良～平安時代頃の貴族の邸宅に現れていた。しかしこれらの目隠しの垣根は、「垣間みる」という言葉が表すように、隙間があり、そこから向こう側の様子を窺い知ることのできるようなものであった。これに対し、隙間なく板を並べて外から見えないようにした板垣というものもあった。

こうした目隠しとして垣根が発展し、それまで不完全にしか限れなかった垣根に対し、完全な目隠しの機能を持つようになったものが塀である。元来、塀は垣根の一種であった。塀という言葉が記録に現れるようになるのは、仏教建築渡来以後のことであり、最初に目隠しになる塀が現れたのは仏寺の境内である。ついで宮殿に使われるようになっていった。

1-3-4. 象徴としての垣根

飛鳥・奈良時代には関西に築地塀が登場し、この頃には築地塀などの垣根が、社会的地位のシンボルとしての機能を持っていたという。昔は臣下の場合には築地塀をつくることは許されなかったが、平安時代頃になると公卿・殿上人の邸宅でも用いられるようになった。しかしこうした土塀は、雨多く風の強い関東では不向きであった上、良質の粘土がなかったために関東地方では一部の寺町を除き、あまり普及しなかったようである。関東が文化の中心になった江戸中期以後の武家屋敷などには、土塀の囲いより高生垣に長屋門の形式が多くみられることから、土塀の代わりに生垣がそのまま社会的地位を象徴する役割を果たしていたと考えられる。

象徴としての垣根は明治時代以降、身分による制限がなくなるにつれ、格式や身分ではなく、富や地位を誇示するための装飾的な意味が強くなった。



図 1-3 寺院の築地塀
(東京都台東区谷中 観音寺)



図 1-4 武家屋敷の生垣
(千葉県佐倉市 旧河原家)
【まちづくり支援ネットワーク佐倉 HP
(<https://net-sakura.jimdo.com/>)より図引用】

1-4. 中世の生垣

1-4-1. 防犯のための生垣

鎌倉時代頃から、棘のある樹種などを用いた防犯のための垣根が登場するようになる。宗教的な意味合いや風流を好む風潮から大きく発達した垣根であるが、この頃からは極めて実用的な、強固で高さのある生垣や塀が民家の囲いとして用いられるようになった。

『鎌倉時代の農家では屋敷地をかこむ生垣の中は、園とか垣内と呼ばれて、不可侵の性格が強かった。たとえば罪人が他人の屋敷内に逃げこむと、その家の主人の許可を得なければ、役人といえども罪人をとらえることができなかったという』

高取(1979)²⁾

当時は兵農が未分化の状態であったため、農民といえども屋敷には格式があり、屋敷地を囲む生垣の中は不可侵の性格が強かった。この頃から生垣にもカラタチやウコギといった、防犯に有利な棘のある樹木が多く選ばれるようになり、室町時代から江戸初期にかけて流行した。

1-5. 近世の生垣

1-5-1. 生業や暮らしのための生垣

古代から中世が垣の発展と取捨選択の時代であったとすれば、近世は大衆化の時代であったといえることができる。これまでは公家や武家、僧侶の邸宅で使われていた

垣根が、より広い民衆の間で使われるようになったのはこの頃からである。

江戸幕府の時代は、幕府による木材資源確保のための森林政策が盛んに行われた時期であり、農村において森林を人為的に改変する動きがあったという。岩崎(1990)³⁾は、近世の農書に屋敷林の扱いについて触れる例が頻繁に見られるようになったことを根拠に、屋敷林が各地方に整備されるようになったのが近世・江戸時代になってからだと主張する。

屋敷林は建築資材としての木材の確保の他、落ち葉や枝は燃料として使用される。また中には実が食べられるものを植えて食料確保の役割を担い、生業のための作業場の確保(防風・防塵)としてなど、従来の垣根としての機能に加えて、農民生活になくてはならない重要な役割を担うようになった。

江戸時代の第3代将軍徳川家光期にあたる慶安2年(1649年)に、江戸幕府が農民統制のために発令した幕法とされている文書『慶安御触書』には、農民の屋敷構えや規模について以下のような指示が与えられている。

- ・ 里方の村では居屋敷のまわりに竹木を植え、その下葉などまで利用し、薪を購入しなくても燃料に不足しないようにしなさい。
- ・ 家屋の前の庭をきれいに整地し、南向きにする。稲・麦・大豆・雑穀類の脱穀作業を行うとき、悪い庭では土砂が混入し売り物にならない。

農民の住居に対する屋敷構えに対する厳しい制限は、農民の贅沢を厳しく管理する目的があった他、農民の飢えや寒さを防ぎ、生活を支えるための目的があったという。



図 1-4 屋敷林のある風景（富山県砺波市）

【砺波市 HP より写真引用】

1-5-1. 鑑賞のための生垣

室町時代後半頃から実用よりも鑑賞に重きを置いた刈り込み生垣が現れるようになり、江戸時代中頃に両手で使う刈り込み鋏が出現すると、瞬く間に民衆の間に広がっていった。それまでは、生垣は自然樹形であるものが多く、樹種も常緑樹から落葉樹、実や花をつけるものと様々であったが、刈り込み生垣が一般的になると、垣根に用いる樹種も強い刈り込みに耐えるものを選ばれるようになった。

また鎌倉中期から室町・桃山と時代を経るにつれ、屋敷地が次第に狭くなっていったことから、屋敷背後の美しい自然を庭に取り入れる「借景」の文化が生まれた。これにより、景色の遮蔽と連続性をつくり、景観を効果的に見せるための要素として生垣を用いるデザインが発達した。「見越の松」などは、その例である。(図 1-5)

こうした生垣に用いられる樹種も、緑一色からサツキ、サザンカ、椿、ボケ、クチナシなど多様化し、四季の移り変わりによって生垣を楽しむ風潮が生まれた。



図 1-5 刈り込み生垣と見越の松
(三重県松阪市 御城番屋敷)

1-6. 近代以降の生垣

従来の「垣」の目的は外敵や自然の脅威から住宅を守り、場所のしきりのように財産権の範囲(境界)を明確にすることが主たる目的であった。垣の一種である生垣は、こうした目的のほかに鑑賞、趣味、実用の面をもち、現代では公害防止機能や震災などの二次災害の防止、街の緑の確保が重要な意味を持ってきている。

生垣に新しい機能が期待されるようになった一方で、時代の変化と共に失われてきた機能もある。多大に恩恵を与えてきてくれた生垣も、近年ではその恩恵が損害に変わってきた為に消失傾向にあるという指摘がある。これらは特に屋敷林において顕著である。屋敷林は上述の通り、従来の生垣の持つ機能とは別に、資材や食料の提供の役割が期待され、江戸時代以降全国的に広まった。しかし燃料や土地利用の変化、管理上の問題からそれらの機能が失われ、伐採され塀や柵で代替されるなどしてその数を減らしてきた。

一方、生垣の意味は再度見直され、こうした新しい機能が期待されることから、多くの地方自治体では生垣助成などを導入して生垣の拡大に務めている現状がある。

1-7. 小括

外敵や自然の脅威から住宅を守る障壁物として、また土地利用の区分を示す境界領域として生まれた生垣は、その時代の生活や生産の必要に応じて機能や形態を変化させ、時代ごとに特色のある垣根文化を発展させていった。(図 1-6)

美しい農村景観は、人が安心して快適に暮らすための空間を獲得するうえで、景観を構成する各要素が造形的に調和して生まれるものである。自然との調和を図る生垣の景観は、まさしくそうした人と自然環境との持続的な関わりの中で生み出された「生きられた景観」そのものであるとわかった。

生垣は原始の時代から 1000 年以上、機能や形態を変化させながら暮らしに欠かせないものとして、今日まで続いてきた。現在の農村集落における住宅の囲いとしての生垣は、長い歴史の系譜の中でこうした機能の変遷を経て、今日の伝統的な農村景観を形成している。

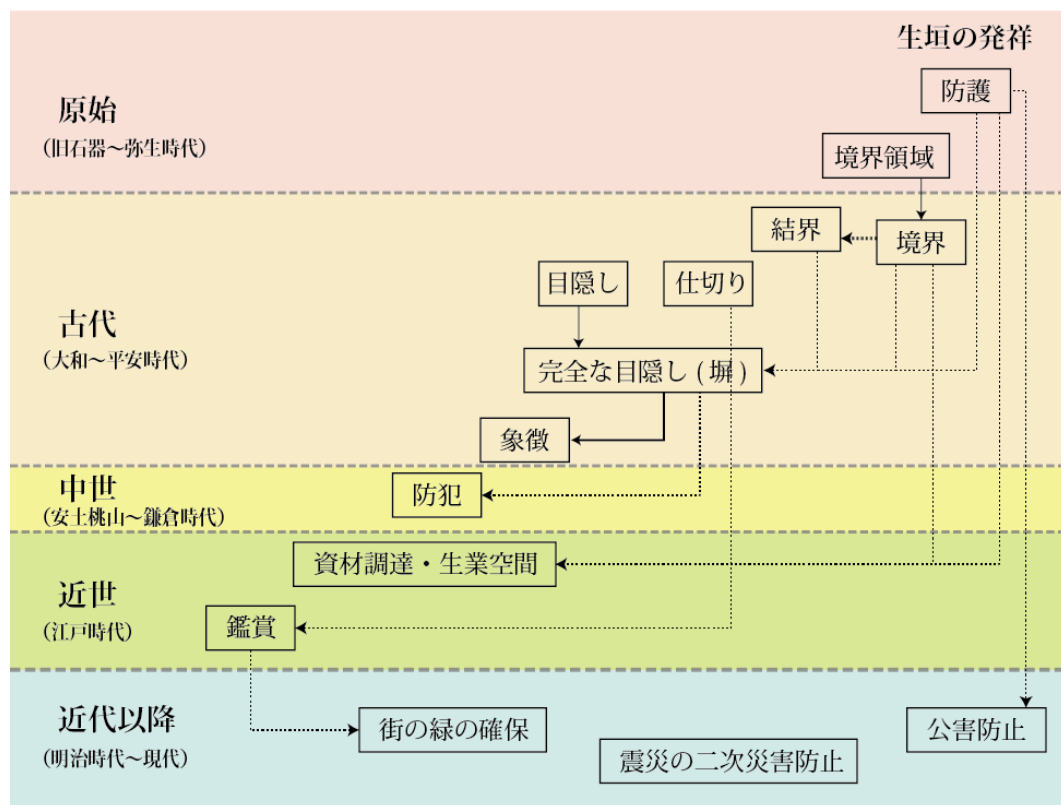


図 1-6 生垣の機能の発展

参考文献

- (1) 伊藤ていじ(1966)「結界の美」, 株式会社 淡交社
- (2) 高取正男(1979)「神道の成立」, 平凡社ライブラリー
- (3) 徳川林政史研究所(2012)「徳川の歴史再発見 森林の江戸学」, 東京堂出版

- ・ 芦原義信(2001)「街並の美学」, 岩波現代文庫
- ・ 矢嶋仁吉(1967)「日本の集落」, 古今書院
- ・ 西山卯三(1989)「すまい考今学-現代日本住宅史」, 株式会社彰国社
- ・ 野田公夫 他(2011)「里山・遊休農地を生かす 新しい共同=コモンズ形成の場」, 農山漁村文化協会
- ・ 清水孝雄(2011)「土地の境界-そのしくみ お茶の間の境界学」, 文芸社
- ・ 岡崎文彬(1975)「図解 生垣・垣根のすべて」, 株式会社誠文堂新光社
- ・ 大野秀俊(1980)「まちの表層. 『見えがくれする都市』」, 鹿島出版会

第2章

安房地域の「自然発生的集落」における生垣の立地特性

第2章 安房地域の「自然発生的集落」における生垣の立地特性

2-1. 本章の目的

1章では、生垣は、人の暮らしと密接に結びつき、時代のニーズに合わせて様々な機能を時代変化の中で獲得し1000年以上続いてきたことがわかった。

本章では、農村集落における、個々の機能的な生垣の集合としての生垣景観に着目し、今日の生垣景観を決定づける集落的要因を明らかにすることを目的とした。

本論文で対象とした安房地域は、多くの集落においてマキの生垣景観が卓越する地域である。本章の流れは以下の通りである。

農村景観を構成する要素として生垣の連なりが特徴的な安房地域の「自然発生的集落」を対象とし、生垣景観の現況調査を行い、生垣の分布とその形態の違いを明らかにする。集落の地形立地のみならず、集落形態や生業、集落内の微地形による生垣の出現状況の違いに着目し、生垣景観を育み今日まで残してきた集落の地理的・社会的特徴を「生垣の立地特性」としてまとめる。

2-2. 安房地域の概要

2-2-1. 概要

後で詳しく述べるが、本論文では、718年に成立した旧安房国（千葉県鴨川市、館山市、南房総市、鋸南町、勝浦市の一部）の範囲を「安房地域」と定義している。

安房地域は房総半島の南端に位置し、西を東京湾、東と南を太平洋、北側は鋸山～清澄山系の山々に囲まれた地域である。「陸の孤島」ともいわれる陸路の不便の一方で古来より海運が発達し、海洋性の文化が根付いてきた。沖合に黒潮が流れ、磯浜が続く恵まれた漁場を持っていることから古くから漁業、また稲作を中心にいちごやびわ、花卉など、温暖な気候や地形を活かした農業が盛んである。近年では豊かな自然環境や「食」を売りにした観光振興に力を入れている。

2-2-2. 安房地域の風環境

千葉県の気候風土についてまとめた吉野(1999)『千葉県の自然誌 本編3』¹⁾を参考に、安房地域の風環境についてまとめる。

『千葉県は半島という地形条件のため、本州の山間地より1年を通じて一般的に風が強い。冬と夏の季節風の卓越風、1日を周期として吹く海岸付近の海陸風、それに台風時の強い雨を伴う強風、また潮風の被害が多い。このような強い風を防ぐために、千葉県では宅地や耕地の防風・防風垣が発達している。』吉野(1999)

加えて、吉野は農家の周囲を囲う防風垣が千葉県では丘陵地帯の谷間で多く見られるとし、その理由として谷の走向に沿う卓越風を挙げている。安房地域は森林率が50%を超える山がちな地形であり、後に述べる対象集落も丘陵地帯の谷間や海岸線付近に立地しているものが多い。安房地域の多くの集落で発達した防風垣が見られるのは、こうした厳しい自然条件の中で人が少しでも住み良い住環境を獲得しようと工夫を重ねてきた結果であろう。

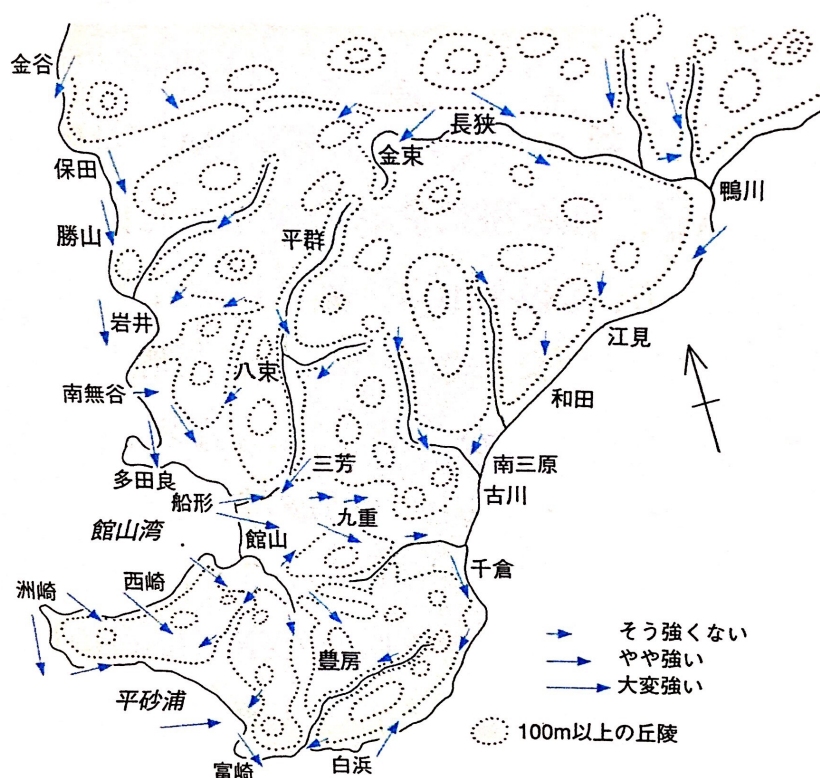


図 2-1 冬期の卓越風向と風力の推定 (柴野 1965) 2)

『東京湾では北寄りの風が強く、館山湾や平砂浦(館山市)では、海を越えて吹きつける西風が強い。一方、太平洋側の地方は、地形で弱められた風が谷筋を下る。この卓越風の違いは、内湾側に屋敷林が多く、外房沿岸に花の栽培が多くなる景観をもたらしている。』吉野(1999)

2-2-3. 千葉県の木「マキ」

マキは中国原産といわれ、琉球から本州南部の暖地に分布しており、房総半島が自生の北限地といわれる。マキという種名はなく、複数の樹種を指す言葉であるとされるが、自生している「イヌマキ」のことをいう場合が多い。常緑性の高木であり、樹高は 20m 以上になる。風に対して強いだけでなく、「水を吹く」といわれるほど水分を多く含んだ葉が密集しているため、類焼防止の効果もある。初冬にはベリーのようなやや甘みのある赤い小さな実を付け、それが昔は子ども達のおやつにもなっていたという。

マキの植木生産は千葉県の匝瑳市が最も盛んであり、その出荷額・輸出量は全国一位を誇る。江戸後期にはすでにこの地域でマキが生産されていたという。マキが生垣として使われはじめた時期は定かではないが、万葉集や古事記には「真木(マキ)」という言葉がたびたび登場しており、古くから有用な樹木として利用されていたことがわかっている。

昭和 41 年にはマキが千葉県の「県の木」として選定されており、マキの他の候補もケヤキ、マテバシイ、と屋敷林の構成樹種が選ばれていたことから、千葉県の風土が生垣(屋敷林)と深いつながりを持ってきたことが推察されよう。



【Web「木のぬくもり・森のぬくもり」(<http://www.jugemusha.com/jumokuF.htm>) より写真引用】

2-3. 集落の選定

2-3-1. 集落の定義

住宅の囲いとしての生垣の変遷を見るにあたり、調査対象は前近代に成立した「自然発生的集落」に設定した。

自然発生的集落は、「無名の民衆の生活が長い時間をかけてつくりあげてきた集落」²⁾ のことで、水利の便が良く、かつ日当りのよいところなどに自然に発生してきた集

落である。この原則にかなう好条件の場所は、台地の周縁の河岸段丘上や丘陵の麓の湧水地点、浸食谷のまわりなど、いわゆる山辺、根方(扇状地の扇頂や丘陵と平野の境)であり、はじめ集落はそのような場所に発生したと考えられている。これに対し、地区全体をある統一的な計画理念に基づいて比較的短期的に作り上げた集落のことを「計画的集落」といい、条里集落、新田集落、門前集落、根小屋集落、宿場町など、規則正しい地割や直線的な道が特徴的である。

自然発生的集落は短期計画的につくられた集落(計画的集落)でない集落と定義した。すなわち、条里集落、新田集落、門前集落、根小屋集落、宿場町など、計画された地割や道路形状を持たない集落とする。

農村集落の居住形式には都市よりも自然環境の影響が顕著に現れており、長い歴史を持つと同時にその構成員の変動も少ない。ゆえに、現在の農村景観にもその影響を色濃く残していると考える。特に文明成立以前の、人が自然的条件の中で居住地域を選び発展させてきた集落であれば、より原始的な生垣(囲い)の発生、自然環境と暮らしに対する意識の変遷を考察するのに最適であると考えた。



図 2-1 自然発生的集落の例
千葉県南房総市千倉町瀬戸



図 2-2 計画的集落(条里集落)の例
千葉県館山市北条

【迅速測図 7)】

2-3-2. 集落の選定方法

自然発生集落はその成り立ちゆえに起源のはっきりしない集落である³⁾。集落の選定には、歴史資料・古地図を用いて以下の手順により、安房地域における前近代の自然発生的集落だと思われる、38の地域を選定した。

まず、平安時代に成立した古代律令制における行政区画である、国・郡・郷の名称を網羅した辞典『和名類聚抄』(930年頃)に記載されている地名を抽出し、抽出された記載地名をさらに『角川日本 地名大辞典』⁴⁾の地名編で検索し、各郷名の説明文

から現在における場所を特定する方法をとった。これにより現存する集落のうち、その成立年が平安時代以前のものを抽出することができた。これらの郡名や郷名は現在まで地名として残ってきたものが多く、その現地比定についてはすでに江戸時代からその考証がなされている。

『和名類聚抄』に記された安房地域の全 30 の郷名と具体的な場所が特定された比定地を以下に示す(表 2-3、図 2-4)。郷は一定のまとまりをもつ数村を指す行政区画であるため、その範囲は現在の地域区分とは異なる。本研究における対象地区の選定においては、史料から各郷の中心的地区であったと推定される集落をその代表的な比定地とした。

郷名と対応する比定地の候補が一カ所に絞りきれなかった四つの郷(平群郡石井郷、平群郡長門郷、平群郡狹隈郷、朝夷郡御原郷)については、それぞれの比定地を一つと数え、全 38 の地域を抽出した。

次に 20 万分の 1 の土地分類図⁶⁾を用いて各集落のマクロな地形分類を把握した上で、古地図や現代地図、航空写真⁸⁾により確認された微細な地形の実態について、齊木(1986)が集落の立地形態の類型化にとった方法と同様の方法⁵⁾で集落の地形立地、集落構造の分析を行った。この方法については後に詳しく記述する。

そしてそれらの結果から抽出された集落の成り立ちについて「計画的集落」であるかどうかの検討を行い、すべての集落が「計画的集落」ではない、「自然発生的集落」とであると推定した。

	「郷」存在時期	『和名類聚抄』郷名		現在の地名
1	平安期	長狭郡	丈部郷	鴨川市大幡
2	奈良期		酒井郷	鴨川市北風原
3	平安期		田原郷	鴨川市太田学
4	平安期		伴部郷	鴨川市和泉
5	平安期		賀茂郷	鴨川市前原
6	平安期		置津郷	勝浦市興津
7	平安期		日置郷	鴨川市二子
8	平安期		壬生郷	鴨川市畑
9	平安期	平群郡	穂田郷	鋸南町保田
10	奈良期		白浜郷	鋸南町吉浜
11	平安期		石井郷	鋸南町勝浦町岩井袋
11’	平安期			南房総市久枝
12			狭隈郷	鋸南町上佐久間
12’	鋸南町中佐久間			
12’’	鋸南町下佐久間			
13	平安期		川上郷	南房総市川上
14			長門郷	南房総市平久里中
14’	南房総市平久里下			
15	平安期		達良郷	南房総市富浦町多田良
16			砥河郷	南房総市上堀
17	平安期		余戸郷	南房総市御庄
18	奈良期	朝夷郡	満祿郷	南房総市丸本郷
19	平安期		御原郷	南房総市和田町上三原
19’				南房総市和田町中三原
19’’				南房総市和田町下三原
20	平安期		大ヌマ郷	南房総市杓見
21			新田郷	南房総市千倉町瀬戸
21’	南房総市千倉町宇田			
22	奈良期		健田郷	南房総市千倉町白子
22’		南房総市千倉町白間津		
23	奈良期	安房郡	白浜郷	館山市正木
24	平安期		大井郷	館山市大井
25	平安期		塩海郷	館山市塩見
26	平安期		大田郷	館山市大戸
27	平安期		河曲郷	館山市西川名
28	平安期		麻原郷	館山市坂井
29	平安期		神戸郷	館山市大神宮
30	平安期		神余郷	館山市神余

表 2-3 安房地域の郷とその比定地

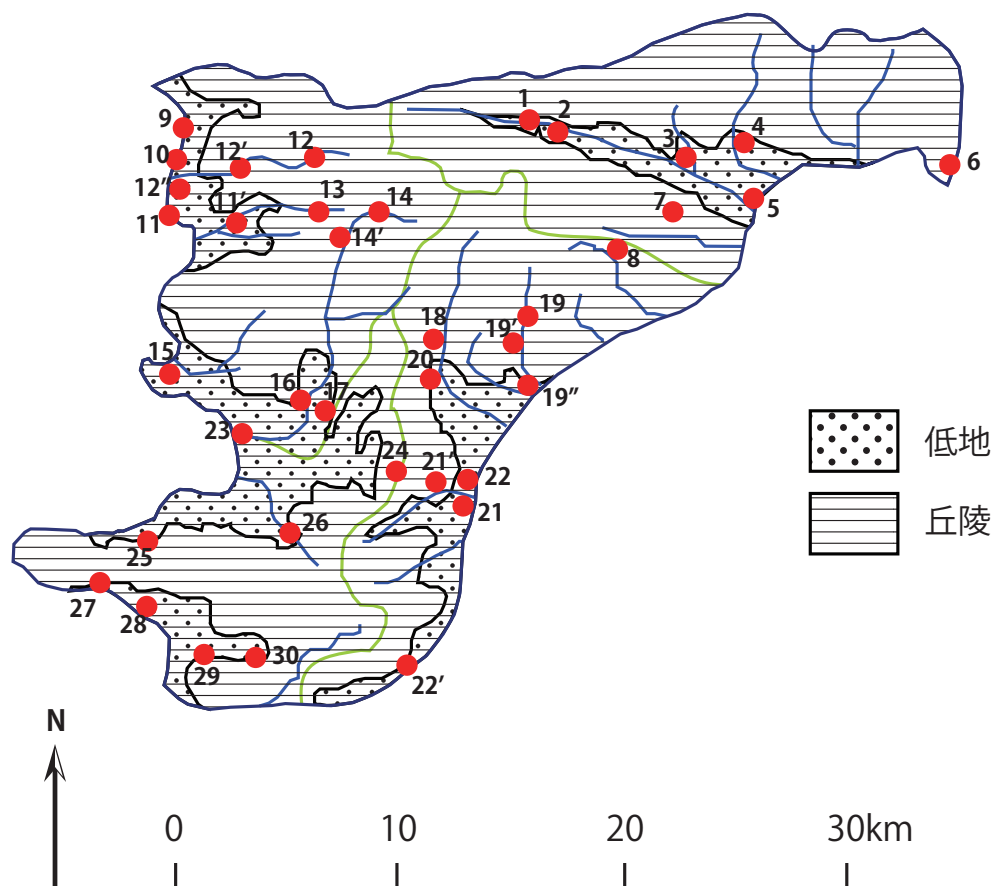


図 2-4 安房地域の郷の比定地プロット図

2-4. 集落の類型化と生垣の変遷

2-4-1. 集落の類型方法

抽出された 38 の地域については、千葉県の地形分類図を用いてその地形立地を調査した。更に集落空間の微地形に注目した齊木(1986)の 地形的立地条件による 12 類型を参考に類型化を行い、集落の地形的特徴を把握した。類型化の詳細については以下に示した。(図 2-5、表 2-6)

また生垣の変遷について、住宅の囲いの識別が可能であった安房地域のカラー航空写真のうち、最も古い 1975 年の航空写真と 2016 年現在の航空写真から生垣の有無と形状の変化を比較した。

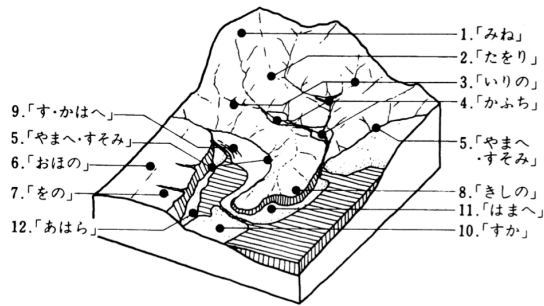


図 2-5 集落空間の地形的立地分類
ブロックダイアグラム

集落空間の微地形に注目し、集落空間の地形的立地条件を基盤とした集落分類。この 12 分類は、山地・丘陵、台地・段丘、低地の全てを含み、かつその下位分類の微地形で人間の居住可能は地形がほぼ全て網羅された類型である。

＜地形分類＞		＜分類の概要＞	＜上代語による命名＞
山地 丘陵地	尾根型傾斜面	尾根上の傾斜面	1.「みね」
	山腹型傾斜面	山腹傾斜面	2.「たをり」
	山間谷底平野	上流末端部	3.「いりの」
		中央部	4.「かふち」
台地 段丘	中・高位置	中央部	6.「おほの」
		周辺部	7.「をの」
		末端部	8.「きしの」
	低位面	氾濫原の中の台地・段丘低位面上	9.「す・かはへ」
低地	微高地	扇状地・自然堤防・砂洲・砂堆	10.「すか」
		海岸・河口平野の砂丘	11.「はまへ」
		海岸・湖岸の汀線付近の砂洲・砂堆	12.「あはら」
	人口地形	氾濫平野の低湿地に人工的に壤土された地形	
境界域	境界域	山麓傾斜面	5.「やまへ・すそみ」
		崖端傾斜面	

表 2-6 地形的地位条件による分類と上代語による命名

【「集落空間の構成原理と地形立地（齊木・1986）」を参考に筆者作成】

2-4-2. 安房地域の自然発生的集落の立地

安房地域は山地が多いその地形的特徴から、台地が少なく、まとまった広大な平野がほぼない。安房地域の陸地中央部は安房丘陵や上総丘陵などが位置するため、集落は自然と丘陵地の周囲を取り囲むような形に、山地や丘陵地の山裾、海岸砂丘や扇状地などの低地微高地といった沿岸地域、もしくは山間谷間に多く立地していた。

こうした地形は生活のための水が得やすく、かつ水はけが良く地盤がしっかりしているものが多い。このことから、安房地域の前近代の自然発生的集落は、人間の生息地に最適な条件を備えた地域が選ばれてきたことがわかる。

2-4-3. 集落ごとの生垣の分布状況

対象集落 38 集落の (a) 集落の立地、(b) 集落空間の立地する微地形による分類（齊木・1986）、(c) 集落形態、(d) 生業と生産の特徴 といった集落の特徴と、

(e) 1975 年 2016 年の生垣の有無、(f) 生垣の形状の特徴をまとめた。(図 2-7)
 生垣の形状は (A)整形か不整形か、(B)住宅の周囲の何面に設けられているか、(C)特定方向に厚みが見られるか、を調査の項目とした。



また集落の立地を大きく【山地・丘陵地】【台地・段丘】【低地】として分類し、それらの立地と集落形態、生業から生垣の分布を考察した。(表 2-8、2-9)

生垣の分布にばらつきが見られた【山地・丘陵地】【低地】については、更に集落空間の微地形による類型化を行い、生垣分布の傾向を分析した。(表 2-10)

38 の地域のうち、住宅の囲いとしての生垣が特徴的であったのは 27 地域であった。このうち特に 21 地域においては、複数の民家の生垣が連なり連続的な生垣景観を形成しているものや、民家が離れて立地するも、周囲を生垣の囲いが囲む特徴的な景観が見られた。(表 2-7 表の○印)

その中でも刈り込まれ整形に保たれているもの(屋敷林など自然樹形でないもの)を赤丸で示している。

表の生垣の有無において△印がついているものは、集落の一部のみで生垣の囲いが確認されたものであり、集落景観としての生垣の要素はやや弱い。

また図 2-8、2-9、2-10 において、1975 年では生垣景観が卓越していたものの、2016 年には生垣が大幅に失われた 3 つの地域を青字で示した。

	調査集落名	a. 立地	b. 集落空間の立地する微地形	c. 形態	d. 生業・生産の特性	e. 1975年の生垣	e. 2016年の生垣	f. 生垣形状
1	鴨川市大幡	岩石台地・鴨川段丘低地	9分類：河岸段丘低位面　上～中央部	散居・散在	稲作中心(棚田)	△	△	2～4面・北西に厚み
2	鴨川市北風原	岩石台地・鴨川段丘低地	4分類：山間谷底平野　中央部	散居・散在	稲作中心	○	○	1～3面・西に厚み
3	鴨川市太田学	岩石台地・鴨川段丘低地	3分類：山間谷間　河川上流～中央部	散居・散在	稲作中心			
4	鴨川市和泉	岩石台地・鴨川段丘低地	9分類：河岸段丘低位面	散居・点在(1～6軒の小塊状)	稲作中心	○	○	3面・北西に厚み
5	鴨川市前原	三角州性低地・鴨川海岸低地	10分類：微高地・海岸平野	集居・列状(高密度)	漁業			
6	勝浦市興津	自然堤防、砂洲・勝浦丘陵	11分類：微高地・海岸低地	集居・列状(高密度)	漁業			
7	鴨川市二子	小起伏丘陵地・清澄山山塊	2分類：山地中腹　斜面地	集居・列状	稲作中心(棚田)			
8	鴨川市畑	岩石台地・嶺岡山山塊	3分類：山間谷底平野　上流末端部	集居・面状(低密度)	酪農、稲作(棚田)、花き類・花木類			
9	鋸南町保田	三角州性低地・鋸山山塊	10分類：微高地・海岸平野	集居・列状	稲作中心	○	○	4面・西に厚み
10	鋸南町吉浜	自然堤防、砂洲・鋸山山塊	11分類：微高地・海岸低地	集居・列状	漁業			
11	鋸南町勝浦町岩井袋	岩石台地・館山南部丘陵	5分類：山裾・海岸線沿い	集居・列状	漁業			
12	南房総市久枝	自然堤防、砂洲・富山山塊	10分類：微高地・海岸平野	集居・面状	漁業、稲作、豆類	○	△	4面
13	鋸南町上佐久間	岩石台地・富山山塊	4分類：山間谷底平野　中央部	集居・面状	稲作中心	△	△	1～2面
14	鋸南町中佐久間	岩石台地・富山山塊	4分類：山間谷底平野　中央部	集居・面状	田畑、花き類・花木類	△	△	1～3面
15	鋸南町下佐久間	岩石台地・富山山塊	5分類：山裾・山地平野境界部	集居・面状(高密度)	稲作中心	○	○	4面・北西に厚み
16	南房総市川上	小起伏丘陵地・富山山塊	3分類：山間谷間　河川上流部	集居・列状(低密度)	田畑			
17	南房総市平久里中	岩石台地・御殿山山塊	4分類：山間谷底平野　中央部	散居・散在	田畑	○	○	2～3面・北西に厚み
18	南房総市平久里下	岩石台地・御殿山山塊	4分類：山間谷底平野　中央部	集居・面状	田畑	○	○	2～3面・北西に厚み
19	南房総市富浦町多田良	岩石台地・館山南部丘陵	10分類：微高地・海岸平野	集居・列状	漁業、野菜類	○	△	
20	南房総市上堀	岩石台地・富山山塊	3分類：山間谷底平野　上流末端部～中央部	散居・点在	稲作中心	△	△	
21	南房総市御庄	岩石台地・丸山丘陵	5分類：山裾・山地平野境界部	集居・列状	稲作、花き類・花木類	△	△	
22	南房総市丸本郷	岩石台地・御殿山山塊	9分類：河岸段丘低位面	集居・面状(高密度)	稲作中心	○	○	4面・北に厚み
23	南房総市和田町上三原	岩石台地・御殿山山塊	3分類：山間谷底平野　上流末端部	散居・点在	稲作中心	△	△	1～3面・北西に厚み
24	南房総市和田町中三原	岩石台地・御殿山山塊	4分類：山間谷底平野　中央部	集居・面状	稲作、野菜類	○	○	4面・北に厚み
25	南房総市和田町下三原	自然堤防、砂洲・千倉低地	10分類：微高地・海岸平野	集居・列状	稲作、野菜類	○	○	4面・北に厚み
26	南房総市沓見	岩石台地・丸山丘陵	9分類：河岸段丘低位面	集居・面状	稲作中心	○	○	4面・北西に厚み
27	南房総市千倉町瀬戸	自然堤防、砂洲・千倉低地	10分類：微高地・海岸平野	集居・列状	半農半漁、花き類・花木類	○	○	4面・北西に厚み
28	南房総市千倉町宇田	小起伏丘陵地・丸山丘陵	4分類：山間谷底平野　中央部	散居・点在(1～3軒の小塊状)	田畑	○	○	3面・北に厚み
29	南房総市千倉町白子	自然堤防、砂洲・千倉低地	10分類：微高地・海岸平野	集居・列状	半農半漁	○	△	4面・西に厚み
30	南房総市千倉町白間津	岩石台地・館山南部丘陵	10分類：微高地・海岸平野	集居・面状	半農半漁、花き類・花木類			
31	館山市正木	三角州性低地・館山平野	10分類：微高地・海岸平野	集居・列状	稲作中心	○	○	4面・北西に厚み
32	館山市大井	岩石台地・丸山丘陵	3分類：山間谷底平野　上流末端部	集居・列状	稲作中心			
33	館山市塩見	岩石台地・館山南部丘陵	4分類：山間谷底平野　河川上流～海	集居・面状	半農半漁	○	○	4面・北西に厚み
34	館山市大戸	岩石台地・館山南部丘陵	4分類：山間谷底平野　山地中腹	集居・面状	稲作中心	○	○	1～3面・南西に厚み
35	館山市西川名	岩石台地・館山南部丘陵	5分類：山裾　海岸沿い傾斜面	集居・列状	畑作、花き類・花木類	○	○	4面・南西に厚み
36	館山市坂井	岩石台地・館山南部丘陵	10分類：微高地・海岸平野	集居・面状	畑作、花き類・花木類	○	○	4面・南北に厚み
37	館山市大神宮	岩石台地・館山南部丘陵	9分類：河岸段丘低位面	集居・列状	田畑	○	○	3～4面・南西に厚み
38	館山市神余	岩石台地・館山南部丘陵	4分類：山間谷底平野　中央部	集居・面状(低密度)	稲作中心	○	○	3面

表　2-7　調査対象集落・安房地域

集落形状 立地分類	面状	列状	散居
山地 丘陵地 	鴨川市畑 △鋸南町上佐久間 △鋸南町中佐久間 ○南房総市平久里下 ○南房総市和田町中三原 ○館山市塩見 ○館山市大戸 ○館山市神余	鴨川市二子 南房総市川上 館山市大井	○鴨川市北風原 鴨川市太田学 ○南房総市平久里中 △南房総市上堀 △南房総市和田町上三原 ○南房総市千倉町宇田
台地 段丘 	○鋸南町下佐久間 ○南房総市丸本郷 ○南房総市杓見	△南房総市御庄 ○館山市大神宮	△鴨川市大幡
低地 	○南房総市久枝 南房総市千倉町白間津 ○館山市坂井	鋸南町吉浜 ○鋸南町保田 鋸南町岩井袋 ○南房総市富浦町多田良 ○南房総市和田町下三原 ○南房総市千倉町瀬戸 南房総市千倉町白子	鴨川市前原 勝浦市興津 ○館山市正木 ○鴨川市和泉

表 2-8 集落の立地と集落形態からみる生垣の分布特性

生業 立地分類	稲作	田畑 畑作	半農半漁	漁業
山地 丘陵地	鴨川市畑 ○鴨川市北風原 鴨川市太田学 鴨川市二子 △鋸南町上佐久間 △南房総市和田町上三原 ○南房総市和田町中三原 館山市大井 ○館山市大戸 ○館山市神余 △南房総市上堀	△鋸南町中佐久間 ○南房総市平久里 ○南房総市平久里下 南房総市川上 ○南房総市千倉町宇田 ○館山市大神宮	○館山市塩見	
台地 段丘	△鴨川市大幡 ○鋸南町下佐久間 ○南房総市丸本郷 ○南房総市杓見 △南房総市御庄			
低地	○鴨川市和泉 ○鋸南町保田 ○館山市正木 ○南房総市久枝 ○南房総市和田町下三原		○南房総市千倉町瀬戸	鋸南町吉浜 鋸南町岩井袋 鴨川市前原 勝浦市興津 南房総市千倉町白間津 南房総市千倉町白子

表 2-9 集落の立地と生業からみる生垣の分布特性

集落立地	集落立地の地形	調査集落名
山地・丘陵地 上部 	2分類 3分類 	鴨川市太田学 鴨川市二子 鴨川市畑 南房総市川上 △南房総市上堀 館山市大井
山地・丘陵地 中央部 	4分類 5分類 	○鴨川市北風原 △鋸南町上佐久間 △鋸南町中佐久間 ○南房総市平久里中 ○南房総市平久里下 △南房総市和田町上三原 ○南房総市和田町中三原 ○南房総市千倉町宇田 ○館山市塩見 ○館山市大戸 ○館山市神余
低地 山辺（急斜） 	11分類 5分類 	鋸南町吉浜 鋸南町岩井袋 勝浦市興津
低地 平野 	10分類 11分類 	鴨川市前原 ○鴨川市和泉 ○鋸南町保田 ○南房総市富浦町多田良 ○南房総市和田町下三原 ○南房総市千倉町瀬戸 南房総市千倉町白子 南房総市千倉町白間津 ○南房総市久枝 ○館山市正木 ○館山市坂井

←-----は斜面方向を示す

表 2-10 集落の微地形からみる生垣の分布特性

【風環境と生垣の関係】

2-2-2 の安房地域の風環境（柴野・1965）と集落の立地をみると、東京湾や館山湾、平砂浦、太平洋沿岸地域など、冬の卓越風力の強い地域に立地が多い。対象集落の多くで卓越した生垣景観が見られるのは、こうした風環境によるところが大きいと考えられる。またこうした風環境と生垣の関係は、生垣が設けられる方向にその影響を見ることができる。

安房地域の集落の多くは冬期に北～北西の季節風が卓越するため、それらの風の向きに厚みのある屋敷林や高生垣を設ける例が数多く確認できた。一方、館山市大戸や西川名、館山市坂井、館山市大神宮など、南～西向きの風が吹く地域では、南西や南北により厚く生垣を設けていた。

【集落空間の微地形と生垣の関係】

集落の大きな立地(山地・丘陵地、台地・段丘、低地)に関わらず、広く生垣の分布が確認された。(表 2-8) これらを微地形に着目して更に分類した表 2-10 より、山地・丘陵地に位置する集落の中でも特に山地山腹や山間谷間上流末端部においては、ほぼ生垣が見られないことがわかった。これは、集落が斜面地のわずかな谷間や等高線上の限られた面積に線状に展開したために、各民家が広大な屋敷面積を持たなかったこ

と、迫る山地が天然の生垣の役割を果たし、防風のために新たに生垣を設ける必要がなかったことなどがその要因として考えられる。谷間上流においては、実際他の地域に比べて冬の卓越風の影響が少ないことが確認されている。(2-2-2 図 2-1 冬期の卓越風向と風力の推定 より)

一方低地においても、急斜面の山裾に沿って展開する集落でも同様に、地形上の制限から生垣が発展しなかったものと考えられる。

【集落形態と生垣の関係】

生垣の分布は集落形態によらず広く見られるが、列状に展開する高密度な集落では生垣は見られない。これは上記で述べたように、集落が立地する地形上の制限から、集落が列状に低密度に展開したためである。

【生業と生垣の関係】

生垣の有無と生業の関わりについては、漁業が生業の中心となっているいわゆる漁村では生垣はほぼ見られなかった。漁村は他の農村集落より比較的敷地面積の小さい民家が高密度に展開しており、庭などの住宅の外部空間を有する民家が少ない。漁村は、農村集落のように住宅外部空間での作業スペースの確保が必要ではなかったことがその要因と考えられる。こうした密集集落では、垣根を設けるスペース上の問題の他、周囲の住宅が風よけとなって、生垣が発達しなかったことが予測される。農村集落においては、その生産の特性に関わらず、生垣の見られる集落が多く存在した。

【生垣形状の変遷】

1975 年の航空写真では、生垣を設ける方角や刈り込みの有無など、集落ごとに特徴的な生垣形状を確認することができた。2016 年の航空写真では、厚みがあり、不整形であった生垣(屋敷林)が細い線状に刈り込まれ、整形な生垣に変わる例が多く見られた。また冬の卓越風の向きに 1～3 面だけ生垣を設けていた多くの民家で、垣根のなかった面に新たに整形な生垣を設けていた。

生垣が美しく手入れさせるようになった一方、海岸平野の一部では開発が進み生垣が失われているのが見られた。

2-5. 生垣の立地特性

安房地域の自然発生的集落において、生垣の分布を決定づける集落の地理的・社会的特徴について、以下のような生垣の分布特性が明らかになった。

集落の風環境 … 冬の卓越風の風力と風向は、住宅の周囲に設けられる生垣の方角と形状(特定方向の厚み)に影響を及ぼす。安房地域の自然発生的集落のほとんどは冬の卓越風の強風域に位置するため、広く生垣の分布が見られる。

集落空間の微地形 … 山間谷間上流に位置する集落では生垣は見られなかったが、山地中腹～低地では広く分布している。低地のうち山裾海岸部に位置する集落では生垣が見られない。

集落形態 … 生垣の分布は集落形態によらず広く見られるが、集落が立地する地形上の制限から、列状・低密度に展開した山間谷間上流や列状・高密度に展開した急斜面の山裾海岸部では、生垣が見られない。また集落内での住宅分布(隣家との距離等)の違いは、生垣の連なりに関係するため、形成される生垣景観に違いがある。

生業 … 比較的敷地面積が小さくかつ高密度に展開する漁村集落では生垣の分布は見られない。農村では生産の特性(生産物等)に関わらず広く生垣の分布が見られる。

生垣の形状の変遷 … 集落の微地形と風環境が住宅周りの生垣の出現位置と形状に影響を及ぼす。1970年代以降、多くの集落で生垣設置面の増加と整形化が進み、集落ごとのこうした微細な違いは見られなくなってきた。

2-6. 館山市塩見区の位置づけと生垣の分布特性

本論文の研究対象地である館山市塩見区は、谷地系に沿って面状に広がる集居集落であり、生業は、昔農業と漁業が同程度行われていた、漁港を有する半農半漁の集落である。集落発生時期は縄文時代と推定されており、原始の時代から1000年以上続いてきた。

集落空間は 3 分類：山間谷底平野上流～4 分類：山間谷底平野中央部～11 分類：微高地・海岸段丘 までがシーケンスにつながる。(2-4 においては、集落内の最も古い時期に形成された住宅地の位置を参考として4分類に分類している。) また現在

も生垣がよく保存されており、1975 年以降、生垣形態に変化が見られた。

館山市塩見区は安房地域の自然発生的集落の中でも特に集落空間の多様性と生垣分布・形態が特徴的な集落と言える。以上の理由から、集落空間内の変容と生垣の変遷を調査するのに最適な敷地であると判断した。

2-7. 小括

生垣の分布は微細な気候や地形の違いといった地理的要因、生業といった社会的要因によって決定づけられ、安房地域の自然発生的集落の中でも集落ごとに個性的な生垣景観を形成していたことが明らかになった。

人がそれぞれその土地の自然条件を微細に感じ取り、生垣で家を囲った帰結として、調和のとれた美しいと感じさせる生垣景観、すなわち「生きられた景観」を生んだことがわかった。こうして、世代を超えて続いてきた囲いとしての生垣の連なりが成す農村景観は、その土地の気候風土や集落の成り立ちを知る手がかりを与えるものである。

しかし、こうした生垣景観の集落ごとの違いは、1970 年代以降、集落空間の変容や、多くの集落で生垣設置面の増加や整形化が進んだことで失われてきている。次章では、そうした集落空間の変容に着目し、生垣の変遷を調査した。

参考文献

- (1) 吉野正敏(1999)「千葉県における風の気候景観」
- (2) 柴野(1965)「南房総における局地気象」, 研究時報,18,p329-337
- (3) 大山勲(2001)「伝統的農村集落における道空間の形態とその形成要因に関する研究 -甲府盆地の平坦地に立地する集居農村集落を対象として-」
- (4) 「角川日本地名大辞典 12」, 角川書店(1984)
- (5) 斎木崇人(1986)「農村集落の地形立地的条件と空間構成に関する研究」, 農村計画学会誌 Vol.4,No.4

- ・ 天野努(2009)「図説安房の歴史(千葉県の歴史シリーズ)」, 郷土出版社
- ・ 樋口誠太郎(1995)「房総の歴史 千葉県のすべてがわかる一古代から現代まで」, 千葉県書籍教材株式会社
- ・ 鴨川市史編さん委員会編集「鴨川市史」
- ・ 勝浦市史編さん委員会編集「勝浦市史」
- ・ 鋸南町史編さん委員会編集「鋸南町史」
- ・ 南房総市史編さん委員会編集「南房総市史」
- ・ 館山市史編さん委員会編集「館山市史」

Web サイト

- ・ 千葉県 HP(<https://www.pref.chiba.lg.jp/>) 最終閲覧日(2018/01/14)
- ・ 鴨川市 HP(<http://www.city.kamogawa.lg.jp/>) 最終閲覧日(2018/01/14)
- ・ 勝浦市 HP(<http://www.city.katsuura.lg.jp/forms/top/top.aspx>) 最終閲覧日(2018/01/14)
- ・ 鋸南町 HP(<http://www.town.kyonan.chiba.jp/kyonan/>) 最終閲覧日(2018/01/14)
- ・ 南房総市 HP(<http://www.city.minamiboso.chiba.jp/>) 最終閲覧日(2018/01/14)
- ・ 館山市 HP(<http://www.city.tateyama.chiba.jp/>) 最終閲覧日(2018/01/15)
- ・ たてやまフィールドミュージアム(<http://enjoy-history.boso.net/>) 最終閲覧日(2018/01/16)

使用地図・航空写真

- (6) 土地分類図(地形分類図)千葉県(1972), 経済企画庁総合開発局
- (7) 迅速測図(1880-1886)
- (8) 国土地理院航空写真(1961年、1975年、2000年、2016年)

第3章

千葉県館山市塩見地区における生垣の変遷

第3章 千葉県館山市塩見区における生垣の変遷

3-1. 本章の目的

第2章では、安房地域の自然発生的集落において、集落ごとの生垣の立地特性とそ
の変化について把握した。本章では、集落空間の多様性と生垣分布・形態が特徴的な
集落であった館山市塩見区(安房郡塩海郷)を対象に、集落空間の変容と生垣の変遷の
関係を、現地調査およびヒアリング調査から明らかにする。

3-2. 館山市塩見区の位置づけと生垣の分布特性

本論文の研究対象地である館山市塩見区は、谷地系に沿って面状に広がる集居集落
であり、生業は、昔農業と漁業が同程度行われていた、漁港を有する半農半漁の集落
である。集落発生時期は縄文時代と推定されており、原始の時代から 1000 年以上続
いてきた。

集落空間は 3 分類：山間谷底平野上流～4 分類：山間谷底平野中央部～11 分類：
微高地・海岸段丘 まだがシーケンスにつながる。(2-4 においては、集落内の最も
古い時期に形成された住宅地の位置を参考として 4 分類に分類している。) また現在
も生垣がよく保存されており、1975 年以降、生垣形態に変化が見られた。

館山市塩見区は安房地域の自然発生的集落の中でも特に集落空間の多様性と生垣
分布・形態が特徴的な集落と言える。以上の理由から、集落空間内の変容と生垣の変
遷を調査するのに最適な敷地であると判断した。

3-3. 千葉県館山市塩見区の概要

3-3-1. 概要

千葉県館山市は房総半島の南端に位置し、東京首都圏から半径 100km 範囲内にあ
る。南房総の中心都市であり、温暖な気候と交通アクセスの良さから観光シーズンに
は多くの観光客が来訪し、1970 年代以降二地域居住地や別荘地としても注目されて
きた。館山市は、船形、那古、北条、館山、館野、九重、西岬、神戸、富岬、豊房の

10 の地区から成り立っており、対象集落である塩見区は西岬地区の 14 の集落の 1 つである。西岬地区は安房の西端に位置し、東京湾に岬のように突き出した地形をしていることからその名がついた。

塩見区は南側の山地から北側の東京湾まで、谷地形に沿って展開する、面積 1.36k^m²、人口 189 人、世帯数 103 世帯の小規模集落である。冬期には「大西」と呼ばれる強い西からの季節風が卓越するため、昔から防風のためのマキの生垣が伝統的集落景観を形成してきた。

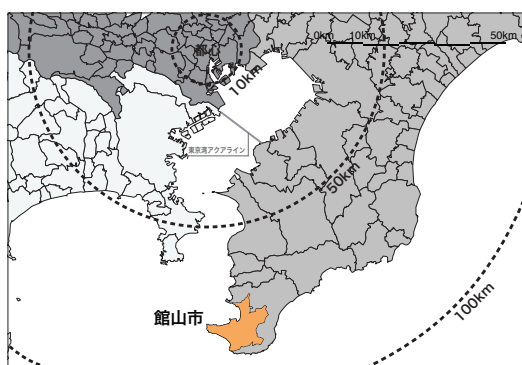


図 3-1 館山市の位置



図 3-2 館山市塩見区の位置



図 3-3 塩見区の生垣景観



図 3-4 伝統的な民家の屋敷構え

3-3-2. 歴史

縄文・弥生時代

人が住み始める

塩見集落ができる(集落の始まりは9軒だった)

古墳時代

横穴墓としてナナツボラがつくられる

718 年(養老 2 年)

安房国成立

奈良時代

奈良の都にアワビを奉納していた

莊園・鎌倉時代	紀州から漁業の出稼ぎの人々が訪房
14 世紀頃	善栄寺の本尊がつくられる
1597 年(慶安 2 年)	塩見などの村々で太閤検地が行われる
1703 年(元禄 16 年)	元禄地震(隣接する香で住宅 44 棟全壊、塩見での被害は報告されていない)
1793 年(寛政 5 年)	塩見村の村絵図が作成される
1871 年(明治 4 年)	塩見・浜田・早物・見物・加賀名・波左間・坂田・洲崎・川名・伊戸・坂足・小沼の諸村が館山藩領となる
1873 年(明治 6 年)	千葉県に編入される
1878 年(明治 11 年)	館山市に蒸気船航路就航
1889 年(明治 22 年)	塩見、香、浜田、見物、早物、加賀名、波左間、坂田、洲崎、西川名、伊戸、坂足、小沼、坂井の 14 集落が西岬村として合併
1919 年(大正 8 年)	安房北条駅(現在の館山駅) 開通
1923 年(大正 12 年)	関東大震災(西岬村で住家 107 棟が全壊)
1929 年(昭和 4 年)	房総環状線全通
1941-1945 年(昭和 24-28 年)	太平洋戦争
1954 年(昭和 29 年)	館山市と合併
1960 年代	西岬一帯を観光地とする開発が始まった 日本でエネルギー革命が起こる(石炭から石油や天然ガスへ転換)
1964 年(昭和 39 年)	見物海岸に国民宿舎・国民休暇村が開業
1966 年(昭和 41 年)	フラワーライン開通
1986-1991 年(昭和 61-平成 3)	日本バブル期
1997 年(平成 9 年)	東京湾アクアラインが開通
2007 年(平成 19 年)	館山自動車道が全線開通

塩見集落含む西岬地区の村々は縄文時代頃には人が住みはじめていたと考えられる古い集落である。山と海に囲まれた地形から長い間半農半漁による自給自足の生活が行われていた。陸路が不便であった分、近代以前は陸路より遥かに優れた流通性を持つ海運が生命線であり、豊かな交流・交易を支えてきた。明治時代になって蒸気船航路が就航すると、その温暖な気候と良好な景観から療養地・保養地として注目されるようになる。その後大正 8 年の安房北条駅(現在の館山駅) 開通、昭和 4 年の房総環状線全通、昭和 41 年(1966 年)のフラワーライン開通を経て、房総半島突端の西岬地区には避暑客、海水浴客が数多く訪れるようになった。近年は都市景観と違う里山・里海を主な観光資源とする体験型・滞在型観光を主体とした観光業が主な産業である。

3-3-3. 人口動態

人口は1970年代からゆるやかな増加が見られたものの、1985年頃以降は一貫して減少し、現在では200人を下回っている。また高齢化が著しく進んでおり、2017年現在塩見区の高齢化率は56.7%となっている。一方世帯数は1960年頃から微増の傾向にあり、2000年に入ってから100世帯前後ではば一定となっている。塩見区内では空き家が多く見られるものの、定年後のUターン者や新規移住者が一定数いるため世帯数が一定に保たれているのだと考えられる。また東京からのアクセスの良さと良好な気候のため、週末や長期休暇のみになってくる二地域居住者もあり、近年ではそうした二地域居住者や新規移住者に旧部落住民が家(元々親族などが住んでいて空いた家や別荘)や畑を貸している例も見られる。

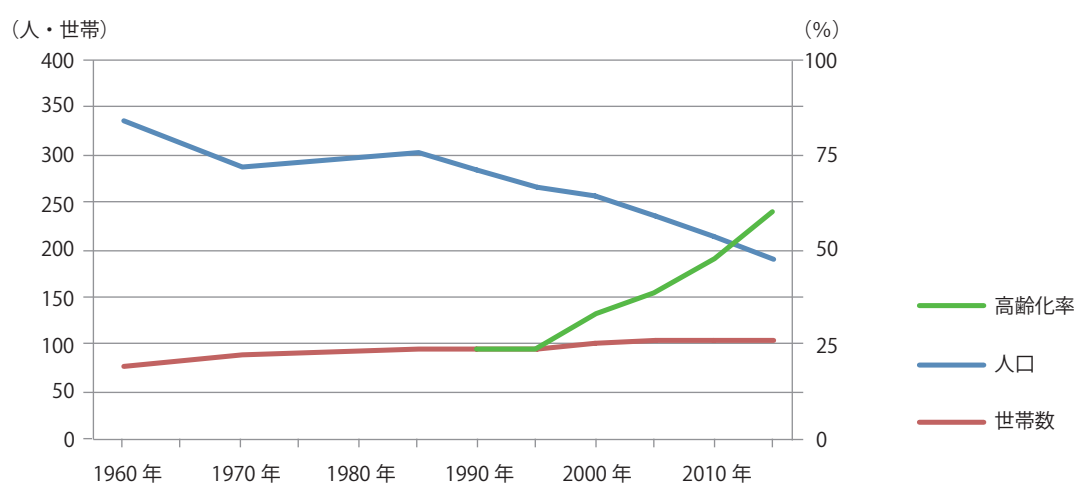


図 3-5 塩見区の人口動態

3-3-4. 集落空間の変遷

塩見の集落空間について、古地図や航空写真、現地でのヒアリングよりその変容を分析した。現存する最古の集落地図である塩見村絵図(江戸時代)からはじまり、集落空間が大きく変容していく戦後1960年代から現在までの集落空間の変遷を整理する。

【江戸～明治時代】

村絵図によると、塩見集落ははじめ、塩見集落の鎮守である御嶽神社を中心とした山間谷間に塊状に展開していた。集落の中央西寄りを通る河川が集落を分断しており、東側に住宅地、西側は住宅がほぼなく田畑としての土地利用が主となっている。水田は河川沿いの狭い面積ではあるが山の奥の方まで広がっていたが、集落全体としては畑地の利用の方が多かったようである。旧道沿いには列状に樹林が存在していた。こうした樹林は海風から集落を守るために意図的に植林、もしくは残されていた防風林であると考えられる。

明治時代になると海沿いの旧道を中心に住宅が増加し、比較的密度の高い列状の住宅地が形成されていく。旧道沿いの樹林帯は縮小するもまだ残っている。

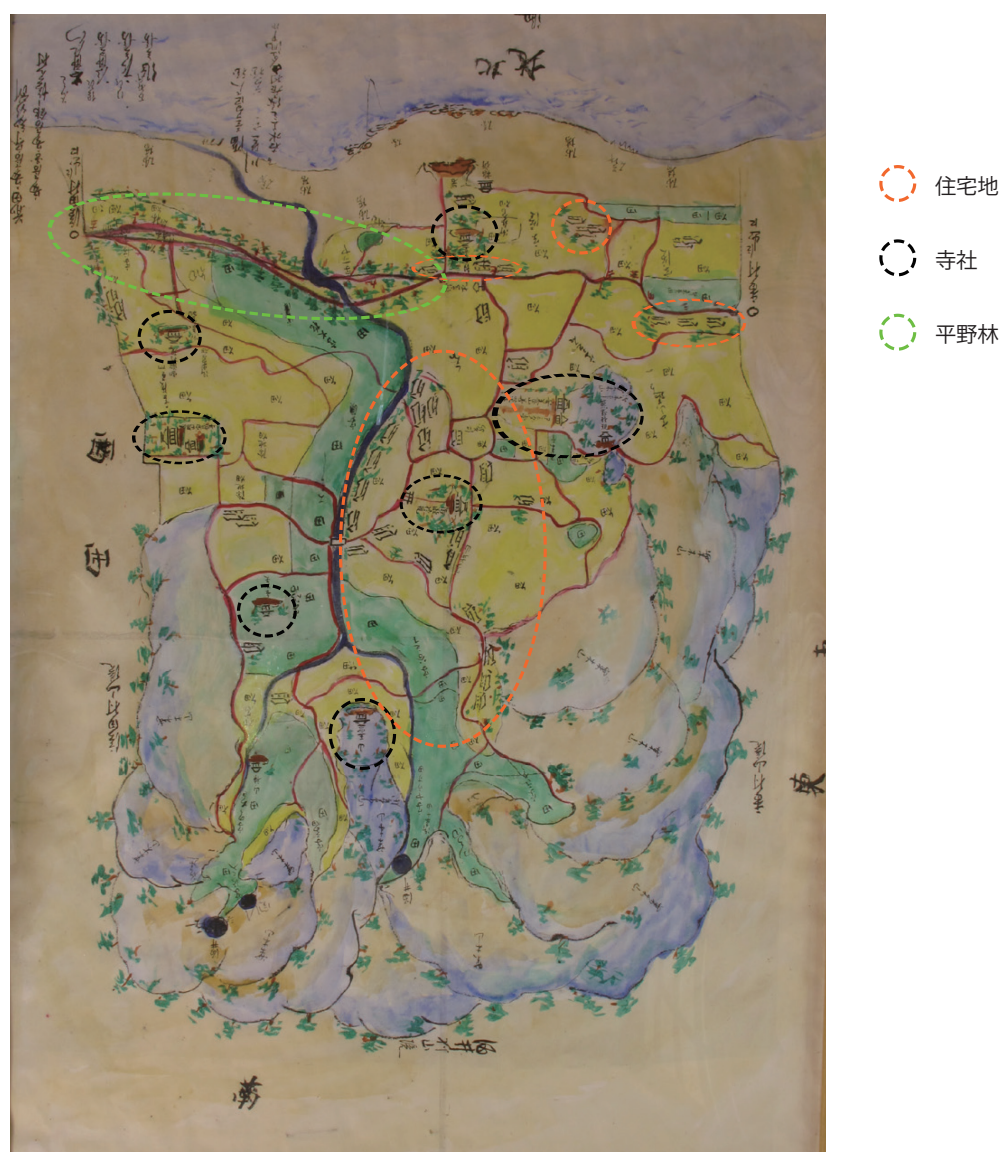


図 3-6 塩見村絵図(1793 年)

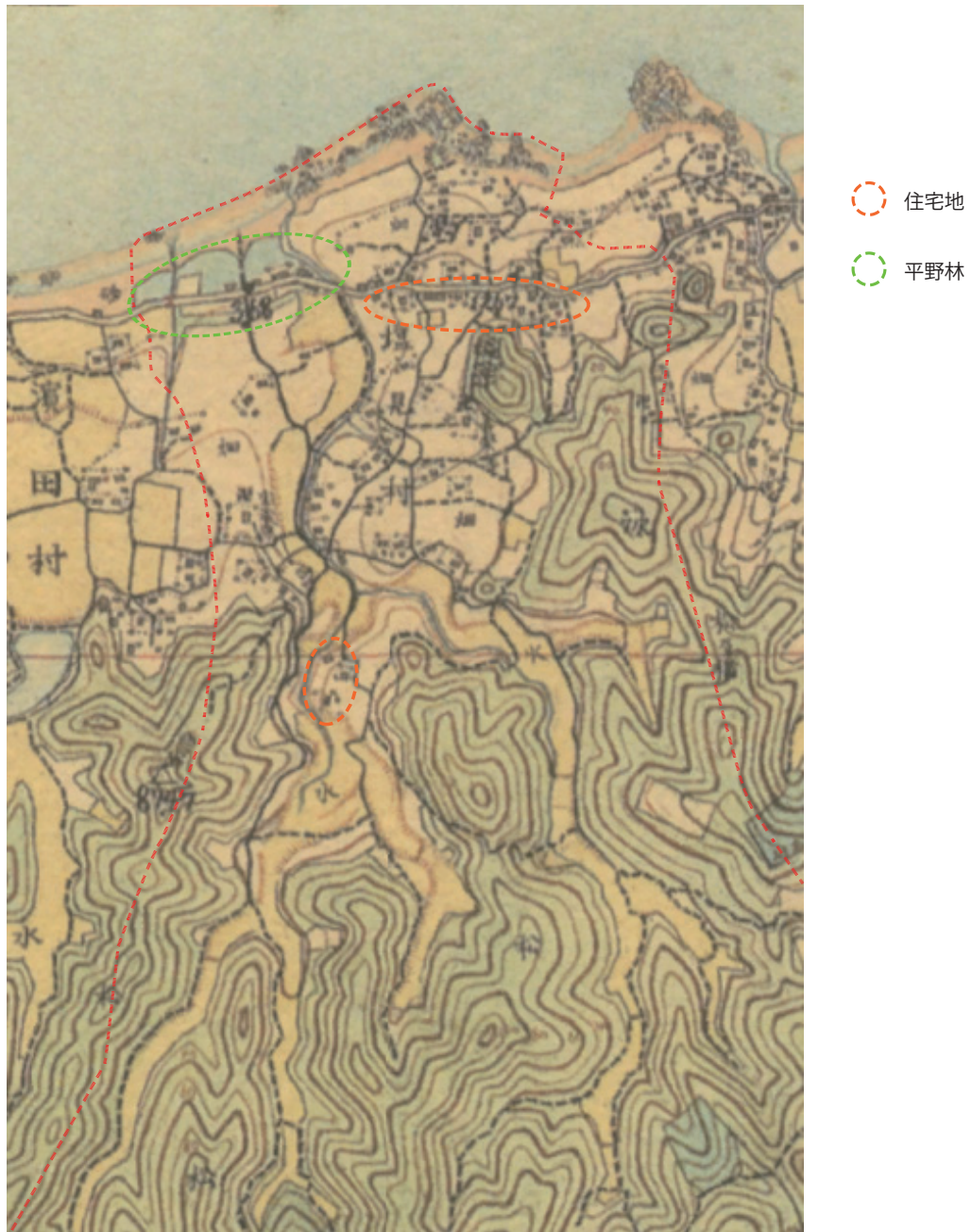


図 3-7 迅速測図(明治時代中期)

【～1960 年代】

航空写真より、旧道沿いの樹林帯が縮小し旧道を中心とした宅地開発が進んだ他には、明治時代からこの頃まで集落空間に大きな変化がなかったことがわかる。塩見区は 1966 年にフラワーラインが開通するまでは中心市街地からのアクセスが悪く、移住者や観光客が増えにくかったために、昔から変わらずその土地利用が維持されてきた。この頃までは半農半漁の自給自足の生活が営まれており、民家もほとんどが茅葺き屋根であった。1964 年に西岬の見物海岸に国民宿舎・国民休暇村が開業し、1966 年にはフラワーラインが開通するなど、西岬一体で観光地開発が進んだ。

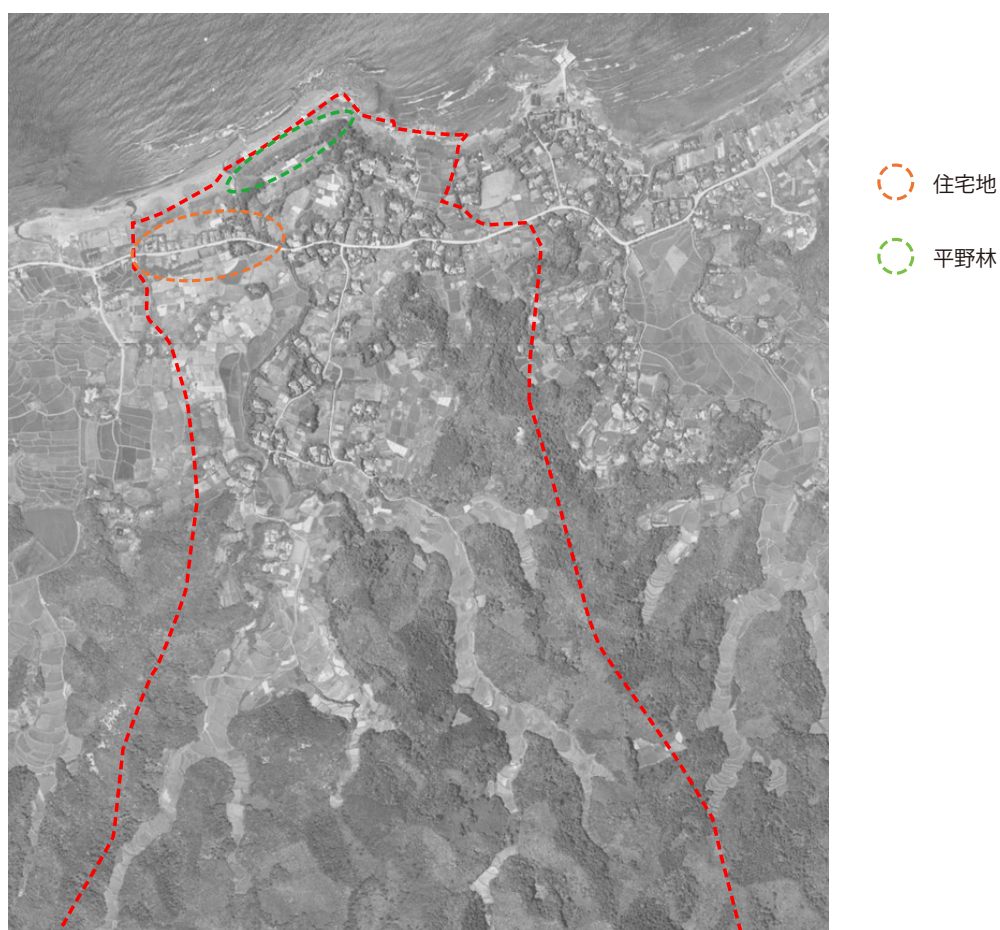


図 3-8 国土地理院航空写真(1961 年)

【1970-80 年代】

フラワーラインの開通をきっかけに、塩見区では民宿・別荘ブームが起こった。この頃は、塩見区でも人口流入に塩見では交通量の多い道路(フラワーライン)が集落を横断したことで集落空間が分断されたため、土地利用にもその影響が表れる。1975年の航空写真を見ると、フラワーラインよりも北側(海側)で住宅・別荘建設が進み、海岸沿いには宿泊施設や学校施設が建設されている。それに伴って海沿いの樹林帯は拡大している。この頃は塩見区の人口も増加に転じた。また 1960 年代に比べ、茅葺き屋根の民家が大幅に減少したことがわかる。



図 3-9 国土地理院航空写真(1975 年)

【1990-2000 年代】

国内の海水浴客数は 1985 年でピークを迎え、その後はレジャーの多様化などによって減少していった。(公益財団法人 日本生産性本部「レジャー白書」より)

塩見区でも 1985 年以降人口が急激に減少し、民宿ブームは下火になっていく。また空き家も徐々に増えはじめた。

航空写真より土地利用の変化をみると、1980 年代に比べてフラワーライン沿いや集落の中心部に住宅や別荘地の建設が進んだ一方で、山の奥の方から田畑が減少していったことがわかる。この頃は高齢化率が急激に上昇し、田んぼや山利用が著しく減少したためであると考えられる。また集落内部においても、空き家になった民家が周囲の樹林に飲み込まれてしまったところが数カ所見られた。

インタビュー調査より、この頃にはほぼ全ての茅葺き民家は建て替えられたり、トタンが被されたことがわかった。集落の神輿が担がれなくなったのもこの頃である。一方で 2000 年代になると U ターン者や退職後に塩見に移住してくる新規移住者が増加した。2000 年頃は戦後生まれの団塊の世代が 60 歳前後の歳になったことがその要因と考えられる。

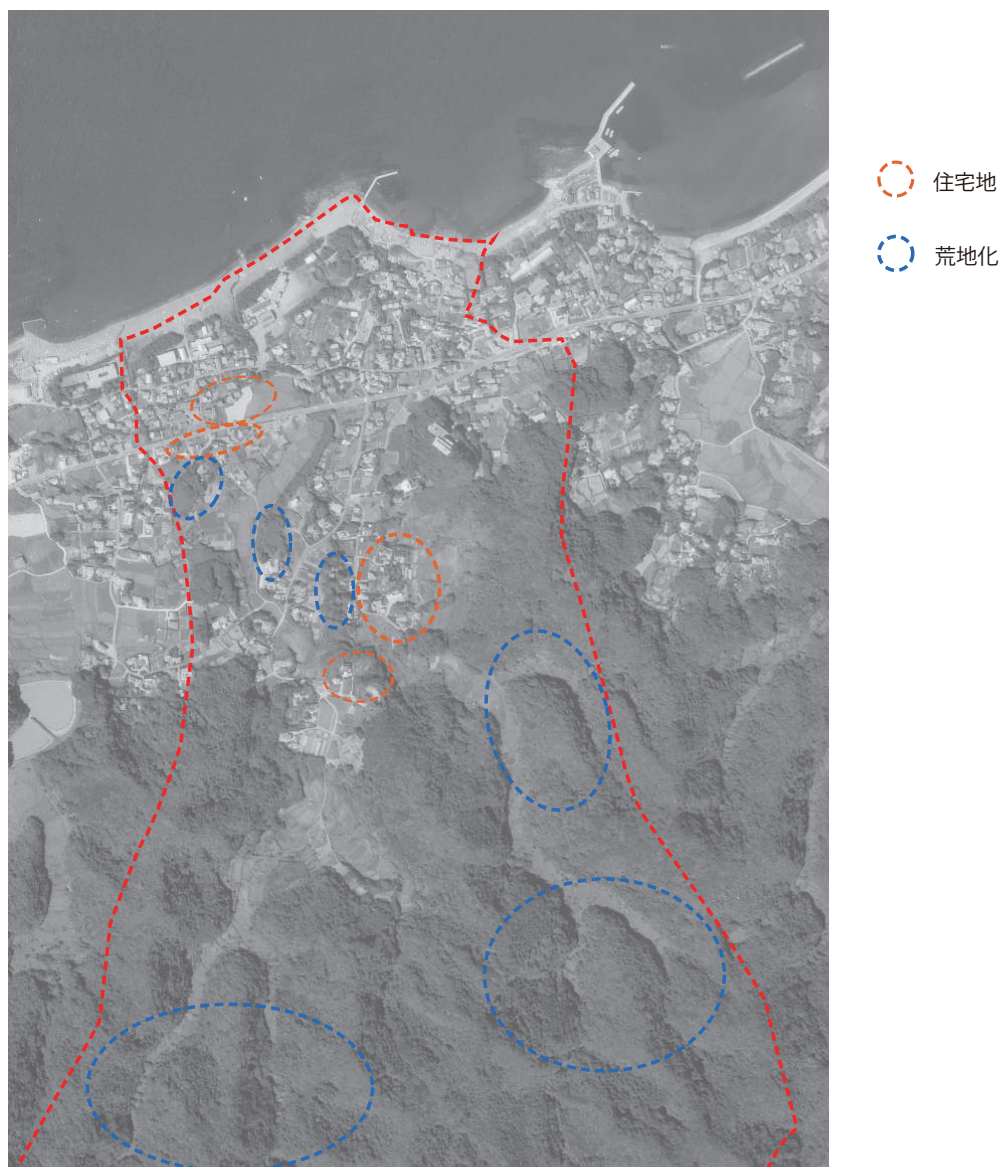


図 3-10 国土地理院航空写真(1990 年)

【2000 年代以降】

集落の至る所で田畑から住宅地への転用が見られた。これまで田畑の利用が大多数を占めていた河川西側はこの頃一気に住宅建設が進む。人口は一貫して減少しているものの世帯数は微増しており、2000 年代以降も移住者や U ターン者が増加していたとわかる。また海沿いに建設されていた学校施設がなくなる一方で高級宿泊施設が規模を拡大している。空き家や耕作放棄地が増え、山間の田畑の荒廃が一層進んだため、集落の土地利用は縮小し山が降りてきていることがわかる。集落の中心部でも河川沿いや微高地に沿った樹林帯に人の手が入らなくなったためにそれらが拡大し、徐々に集落を飲み込んでいる。一方で住宅地だった箇所が太陽光発電所として利用されている例もある。



図 3-11 国土地理院航空写真(2016 年)

また平成25年度の館山市の大字別農地利用現況調査によると、塩見区では現在半数以上が非農地となっており、非農地予備軍である程度の悪い耕作放棄地を含めると6割以上に達している。

上記で述べた通り、塩見区では地形的に山が海まで迫っており、山間の谷にある農地は基盤整備されていない、小規模なものがほとんどであったため、館山市の中でも特に急激に耕作放棄地化が進んだと考えられる。日があまり当たらない農地、水はけの悪い農地など条件が悪い農地から順に、耕作放棄地となっていた。

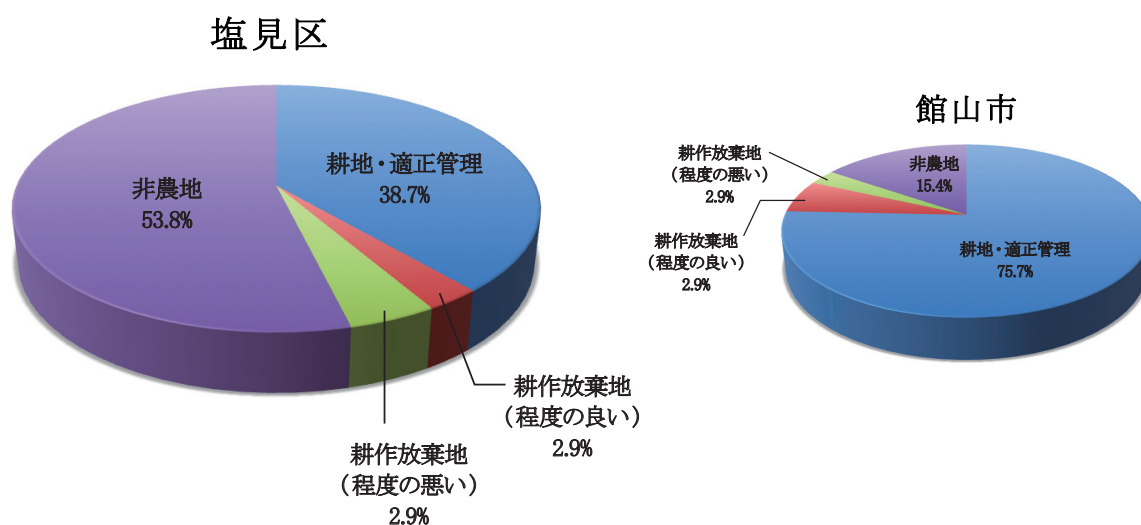


図 3-12 平成25年度 農地利用現況
【館山市大字別農地利用現況調査結果より筆者作成】

前近代～現代までの館山市塩見区の空間変容は以下のようにまとめられる。

<集落空間の変容のまとめ>

- ・ 塩見集落は始め河川と山地に挟まれた平地「山間谷間(谷底)平野」に塊状に展開し、徐々に住宅地を拡大させていった。

塩見集落の住宅地の展開

山間谷間平野(塊状) → 旧道沿い(列状) → フラワーライン沿い(列状) → 集落奥地、河川西側(元田地)
フラワーラインより北側(面状)

- ・ 1960年頃までは旧道より北側(海側)には寺院と数軒の住宅があるのみであった。
- ・ 1960年代頃までは半農半漁の自給自足の生活が営まれていた。
- ・ フラワーラインが開通してから海側の開発が進んだ。
- ・ 1960年代-80年代頃まで交通網の改良やエネルギー革命によって新築住宅・別荘・宿泊施設が急増した。
- ・ 茅葺き屋根の民家から普通の民家への転換期は1970-80年代頃で、1990年・2000

年頃にはほぼ全ての民家が茅葺き屋根ではなくなっている。

- ・ 1990 年代以降、別荘・民宿ブームは下火になり、空き家や未利用地が見え始める。
- ・ 山や田畑の土地利用の縮小は 1990 年頃から見られるようになった。
- ・ 1990 年代以降、空き家の生垣が周囲の森林と一体化して家屋を飲み込んでいった。

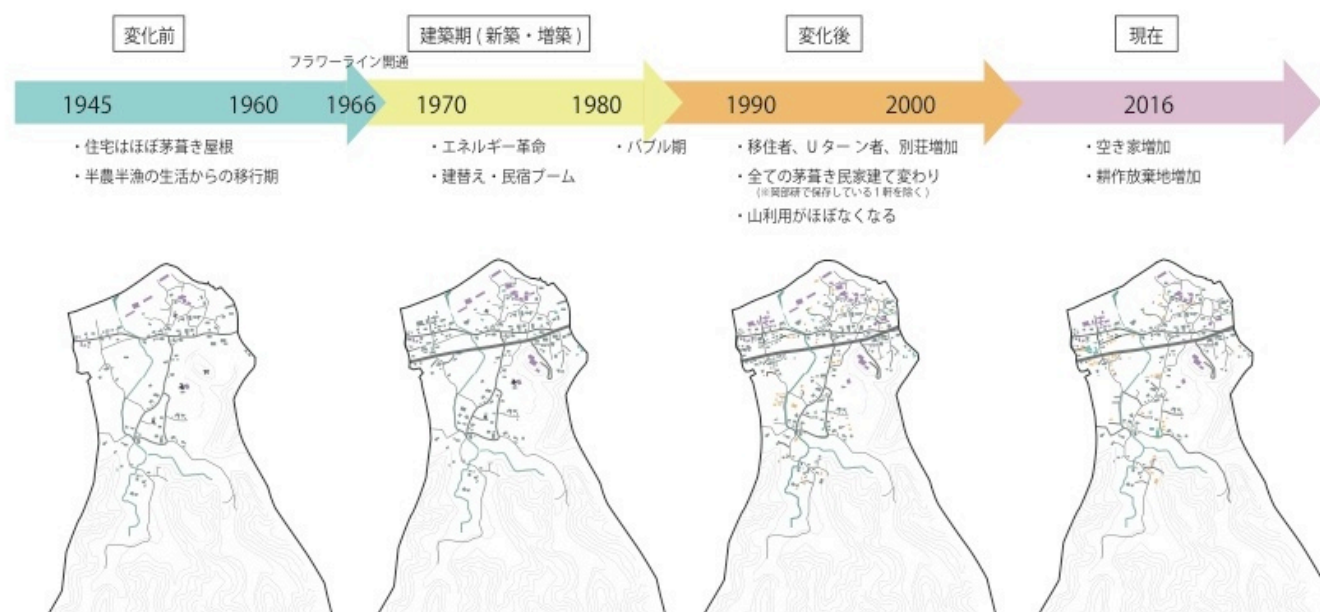


図 3-13 館山市塩見区の変容

集落空間の変容の過程と第 2 章での塩見区の集落分類の結果から、塩見区の集落空間は山間中腹斜面地、山間谷底平野、海岸段丘の 3 つに大きく分類することができ、それぞれ以下のような特徴があることがまとめられた。

集落空間の分類	集落空間の特徴
山間中腹斜面地	集落の奥地に位置し、最も後に住宅地が発展。それまでは田畑としての土地利用のみ。山地や林野といった微高地の隙間に住宅地が展開。微高地を背にして道路－住宅－微高地 の順に住宅が立地。
山間谷底平野	最初に塊状集落が発展したところ。丘陵地と川の上に挟まれた平野部。比較的低密度で周囲を田畑に囲まれた住宅が多い。江戸時代からの変容が最も少ない。
海岸段丘	山間谷底平野の次に住宅開発が進んだところ。住宅だけでなく、別荘や宿泊施設、学校施設などが多い。開発以前は寺地や防風林、田畑としての土地利用であった。住宅は街路沿いに列状に比較的高密度に展開。

図 3-14 塩見区の集落空間の分類

3-4. 塩見区における生垣の変遷

こうした集落空間の変遷を踏まえ、住宅の囲いとしての生垣がどのように変わっていったのかを 3-2-4 同様に古地図や航空写真、現地調査から分析した。

3-4-1. 古地図からみる生垣

塩見の村絵図、迅速測図に現れている住宅の囲いから、この頃の住宅の囲いとしての生垣について考察した。

村絵図を見ると、3-2-4 でも述べたとおり海岸沿いには防風林としての樹林帯が見られる。またこの頃には既に住宅の周囲を取り囲む屋敷林の存在が確認できる。家と家の境界部にも生垣(屋敷林)が設けられており、敷地の境を示す機能も果たしていたことがわかる。道路と住居の境には樹林は描かれておらず、屋敷林は道路と反対側；住宅の背後に存在するのみであった。一方集落内の全ての寺社は、住宅の周囲を囲む屋敷林のように特定の方向のみに存在するものではなく、四方を樹林に囲まれている。寺社の生垣(寺社林)は「神聖な場所を区切る結界」としての機能を強く持っていたのに対して、住宅の囲いに敷地を区切る「結界」としての機能はなかったと考えられる。

(図 3-15)

迅速測図でもほぼ全ての住宅が生垣に囲まれていたことが確認できる。この頃、敷地の形状は住宅を中心とした整形な長方形が多かった。(図 3-16)

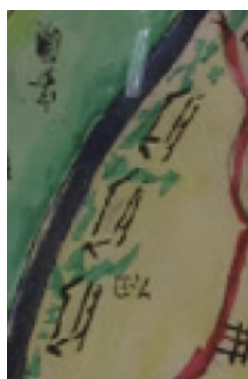


図 3-15 屋敷と寺社を囲む生垣
【塩見村絵図】

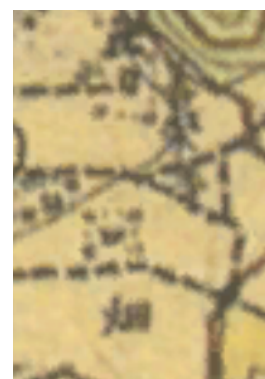
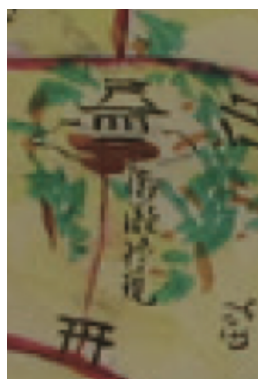


図 3-16 屋敷を囲む生垣
【迅速測図】

3-4-2. 館山市塩見の伝統的民家の生垣

塩見区の伝統的民家の屋敷構成は、茅葺きの主屋と蔵と炊き場(台所・風呂)の3棟から成り、敷地入り口から主屋入り口までの間に広庭を設けて、周囲をマキの生垣が囲む図3-17のようなものが一般的である。屋敷の後方にはマテバシイなどの高木が植えられ、北西からの冬期の季節風の風よけと生活のための燃料や木材調達に利用されていた。こうした民家の生垣は茅屋根を強風によって飛ばされるのを防ぐ目的があった他、簡素な住宅を少しでも暖かく保つ目的があった。また住民の多くが農業に従事していた頃は、主屋の前の広庭は農作業や出荷作業のための大切な作業スペースであった。

同地区において茅葺き民家と里山生態系の関係について研究した佐々(2015)¹⁾によると、塩見区での民家は1945年頃までは全て茅葺き屋根で、60軒ほどあったという。それが、生業や集落空間の大きく変化した1970年代頃になると1/3程度にまで減少した。

敷地内で民家の建て替えが頻繁に起こるようになっていった1960年代以降、こうした屋敷構成もそれに伴って変容していったと考えられる。

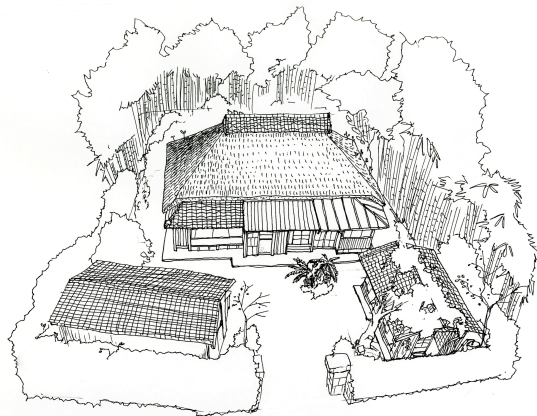


図 3-17 伝統的民家の屋敷構成
(森・2013²⁾)

3-4-3. 新築住宅における住宅の囲いの変遷

1960年代以降の住宅の囲いの変遷について、住宅の建設時期と囲いの形状の違いから年代ごとの傾向を調査した。

調査の方法は、現地調査(2017年10月)によって確認できた塩見区内の160軒の民家とその囲いについて、各年代の住宅地図により、【~1960年代】、【1970-80年代】、【1990-2000年代】、【2000年代~】の4つの年代区分でその出現時期を分類した。これは同一敷地内での建て替えによる新築を除く、非住宅地→住宅地への転換を伴う新築のみを扱うものである。(ある敷地に一番始めに住宅が現れた時期で区分。1960年代以前のものは1960年代の出現としている。)

また住宅の囲いについては、大野（1980）の「住宅の表層断面の類型化*」を参考に、一次面(住宅壁)と二次面(囲障)の距離と二次面(囲い)の透過性から以下の 9 タイプを設定し、類型化した。





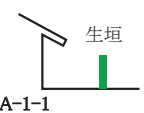
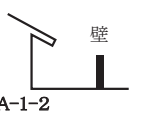
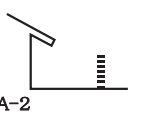
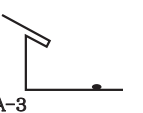
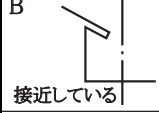
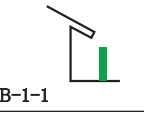
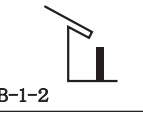
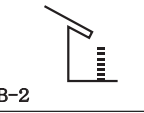
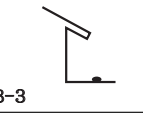


二次面の透過性 一次面と二次面の距離	1  壁的		2  格子的	3  標識的
A  離れている	A-1-1  生垣	A-1-2  壁	A-2 	A-3 
B  接近している	B-1-1 	B-1-2 	B-2 	B-3 
C  二次面なし	C 			

図 3-17 住宅の表層断面
の分類表

A と B の区別は敷地面積によらず、敷地正面から住宅正面(入り口側)までの距離に基づき分類を行った。(一部の住宅では同敷地内での建て替えによって A→B への移行が見られた。) A は敷地入り口 - 庭 - 住宅入り口の形態になっているもの、B は一次面と二次面が接近し、敷地入り口からすぐに住宅入り口に行けるものを指している。また二次面が壁的なもの(1 類型)については、その二次面が生垣(屋敷林や植木など自然樹形を含む)のもの、壁(コンクリート塀など人工的な構造物)であるものの 2 タイプに分類した。

* 住宅の表層断面の類型化 …大野（1980）は道路から見た塀と住居の関係を住宅の表層景観と定義し、住宅の表層断面を一次面(住宅の壁)と二次面(塀)との距離、二次面の透過性から分類した。

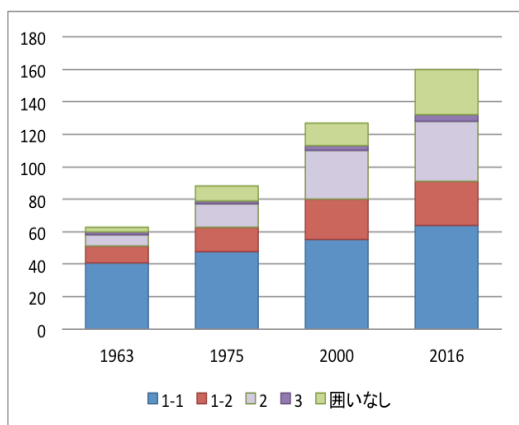


図 3-18 住宅の二次面の透過性
ごとの住宅数変遷

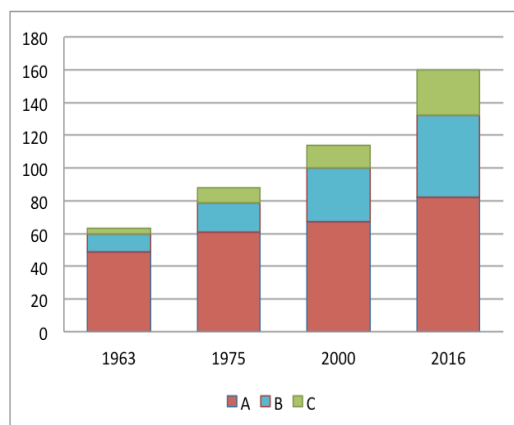


図 3-19 住宅と住宅二次面との距離
ごとの住宅数変遷

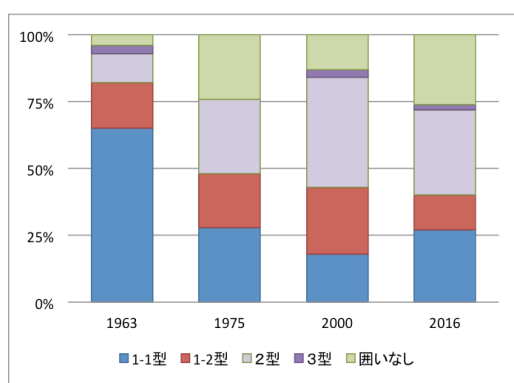


図 3-20 年別二次面の透過性
ごとの出現率

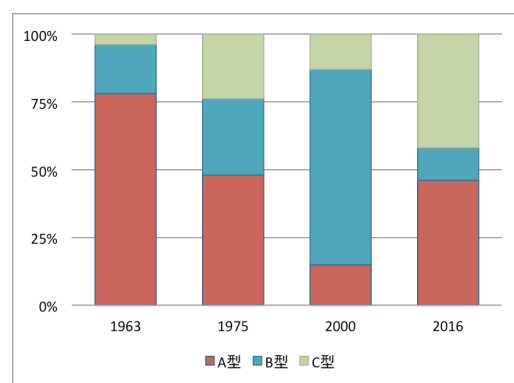
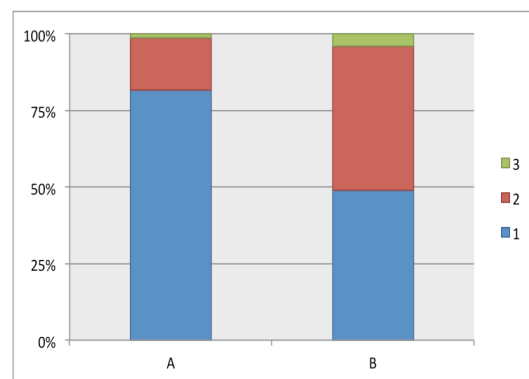


図 3-21 年別住宅と二次面との距離
ごとの出現率



図 3-22 年別二次面の高さ
ごとの出現率



これらの結果から、塩見区における住宅の囲いの変遷の特徴を整理した。

【1960年代までの住宅の囲い】

1960年代までの囲いは、約8割が不透過な壁的なもので、高さは1.5mを超えるものが多かった。1960年代頃には60軒ほどの民家のうち、40軒程度（約7割）が

生垣の囲いであった。また民家の 8 割以上が主屋の前に前庭を設ける屋敷配置(A 型)をしていたことから、1960 年代頃までは 3・3・2 のような屋敷配置が塩見区では主だったことが推察される。

【1970 年代以降の屋敷配置】

屋敷配置は、1970 年代頃までは A 型の出現が半数程度であったものの、1990~2000 年頃には約 9 割の民家が B 型の屋敷配置、もしくは囲いを設けなくなった。2016 年には再び A 型配置の住宅の出現が見られるが、全体の増加率でみると微々たるものである。

【1970 年代以降の住宅の囲いの形態】

1970 年代は、住宅の囲いや屋敷配置に多様化が見られるようになった頃である。格子的な囲いや囲い自体のない家が生垣の囲いのある家と同程度出現するようになり、囲いの高さも目線より低いものをつくることが主流になってきた。1970 年代以降は生垣の囲いよりも、コンクリート塀などの不透過な壁状の囲いや格子的囲いの設置が増え、囲いの高さも腰の高さよりも低いものが多く採用されるようになる。こうした傾向は 2000 年頃まで見られる。2000 年代以降は屋敷配置や囲いの形態変化は落ち着きをみせ、全体の流行よりも各々にあった最適なものを選ぶ傾向にある。(住宅の囲いの多様化)

3-4-4. 生垣の分布変遷

続いて、比較的画質が鮮明で住宅の囲いの識別が可能であった①1961 年、②1975 年、③2016 年の航空写真と現地調査の結果より、住宅の囲いとしての生垣の出現と消失の状況を調査した。



図 3-24 1960 年代の生垣分布



図 3-25 1970 年代の生垣分布



図 3-26 2016 年の生垣分布

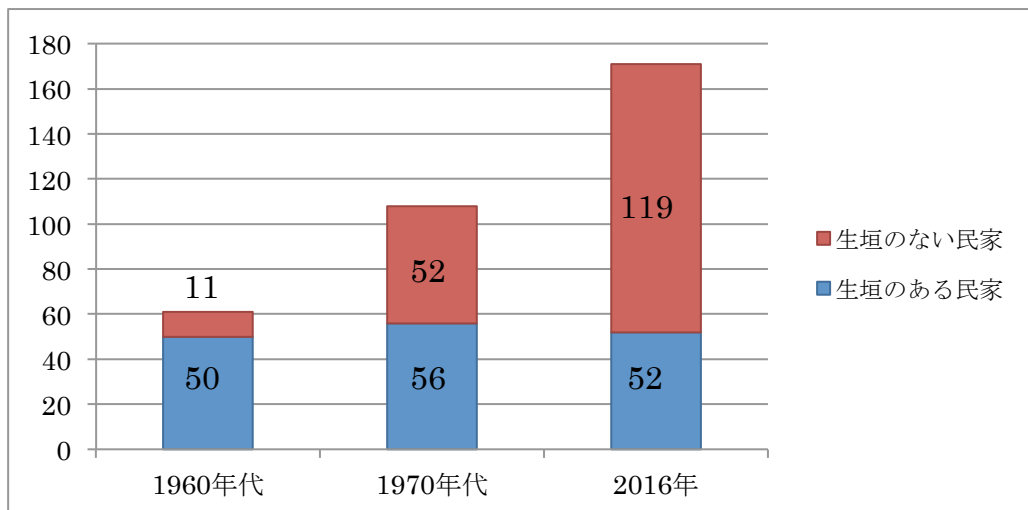


図 3-27 生垣の囲いを設ける民家数の変遷

1960 年代までは、山地中腹斜面地に立地する民家を除く、ほぼすべての民家が生垣に囲まれていたことがわかった。山地中腹斜面地に立地する民家では、生垣のないものも比較的多く見られたが、これは生垣の代わりに自生している樹林帯が民家の周囲を囲み、自然の生垣となっていたことがその要因と考えられる。山地から離れたその他の場所では、生垣の立地に差異は見られなかった。

1960年代から1970年代にかけては、一部の土地の細分化やフラワーライン建設によって一部の生垣が消失したものの、比較的その残存率は高い。またこの頃は新たな生垣の出現も多く見られた。

一方、1970年代以降は新たな生垣の出現は減少し、代わりに海側の宿泊施設建設や古くから住宅が発達していた山間谷間平野での空き家の増加をきっかけに、生垣の消失が多く見られた。住宅の空き家を原因とする生垣の消失は、生垣の樹木が野生化し、住宅を飲み込みながら周囲の森林体化することによって起こっていた。

また1960年代以降は塩見区内で新築住宅建設が急増し、塩見区内の住宅数は2016年までに2倍以上に増加したが、新たに建築された民家のほとんどは生垣を持たなかった。そのため生垣のある民家の全体数にはあまり変化がないものの、1960年代は9割近かった生垣のある民家の割合が、1970年代には約5割、2016年には約3割にまで減少した。

3-5. 集落空間の変容と生垣の変遷

3-2-4の集落空間の変容と、3-3-1～3-3-3までの生垣の変遷から、集落空間の変容と生垣の変遷については以下のことがわかった。

【住宅の囲いの多様化】

1960年代以降の屋敷配置や囲いの多様化は、囲いに生垣を設けるという制限から開放されて好きな形態のものを設置できるように選択肢が増えたことを意味する。1960年代以降は、塩見地区での半農半漁からの以降期である。それまでは生業のための広庭や住宅を強風から守らなくてはならない制限から、高い垣根を必要とし、そのために安価で設置の容易だった生垣が必然的に選択されていたと考えられる。

【生垣景観の変化】

塩見では、1970年代以降、エネルギー革命や交通網の発展、生業の転換などの社会変化の影響を受け、人口増加に伴う新築ブームや別荘建設、民宿ブームが起こった。それにより、近代以前から大きな変化なく維持されてきた集落空間が大きく変容することになった。それまで塩見では、50・60軒前後の茅葺き民家とそれを取り囲む生垣が、集落中央の山間谷底平野～海岸段丘上位にかけて連続し、田園風景と調和した美しい景観を形成していた。しかし1960年代以降の観光地開発やフラワーライン開通

をきっかけに、海側や旧田地などを中心に生垣の囲いのない民家が急増すると、連続的な生垣景観が失われた。現在では旧部落民の民家が多く残る山間谷底平野と旧道沿いの一部にその連なりが見られるのみである。

【生垣景観の維持】

塩見では昔からの生垣は良く保存されており、海側の開発によるもの以外で生垣が失われた民家は、空き家になってそのまま森林や竹林の一部になったもの、もしくは空き家の解体に伴って伐採され更地になったもののみ見られた。塩見においては生垣の消失の思たる原因は空き家化だといえる。

3-6. 小結

館山市塩見区において、1970年代以降は、集落空間にとっても、生垣にとっても大きな転換期だったことがわかった。それ以前は、集落の地形的要因と生業などの社会的要因といった、自然環境と密接に結びついた条件が住宅の囲いを決定づけていた。

1970年以降起こった新築ブームは、生垣景観の連続性に影響を与えたが、塩見の古くから生垣を構える住宅では、茅葺き民家からの建て替えの後も生垣が保存され現在まで残っているものがほとんどであった。1980年頃から集落内で森林に飲まれる空き家が見られるようになり、人の手による継続的な管理を離れた生垣が、自然の一部に還る様子が見られた。

塩見において新築住宅の囲いが多様化したことは、住宅の堅牢化や生業の変化から生垣の「防護」としての機能の必要性が薄れてきたことを意味する。そのような変化の中でも、塩見集落において生垣景観を維持する何かしらの要因があることが示唆された。

参考文献

- (1) 佐々夏来(2015)「里山生態系の要としての茅葺き民家の研究」
- (2) 森(2012)「廃屋キッチン かやぶきの家ハナレの改修提案」

- ・ 石井実(2005)「生態学からみた里やまの自然と保護」, 講談社
- ・ 平成22年国勢調査(総務省統計局)

使用地図

- (1) 塩見村絵図(1793年; 寛政5年 作成)
- (2) 国土地理院航空写真(1961年、1975年、1990年、2016年)
- (3) 国土地理院地図(1960年、1975年、2000年、2017年)
- (4) ゼンリン住宅地図(1960年、1990年、2017年)

第4章

暮らしの変化と生垣の変遷

第4章 暮らしの変化と生垣の変遷

4-1. 本章の目的

本章では、3章の館山市塩見区の集落空間の変容と生垣の変遷を踏まえ、この変遷の具体的要因を現地調査およびヒアリング調査により明らかにする。ヒアリング調査では、1章で整理された生垣の機能が、人々の暮らしの中でどのように変化したのか、また個々の機能的な生垣の集合としての生垣景観の価値がどのように変わってきたのかを、人と生垣の持続的な関係性の中で考察することに主眼を置いた。そして今日まで生垣景観を守ってきたものが何かを明らかにすることを目的とした。

4-2. ヒアリング調査について

本ヒアリングでは、生垣と人の暮らしとの関わりを調査するため、住宅の囲いに生垣を設けている塩見区の住民8名を対象に行った。ヒアリング対象者の属性は、地区内出身者が6名、地区外からの移住者が2名である。塩見区内出身者は6名全員が幼少期から塩見に暮らし、茅葺き民家であった頃からの転換期を経験している。また2名の移住者については、集落の変容期(1970-80年代)に移住してきた人、変化後(1990年代)に移住してきた人がそれぞれ1名ずつである。ヒアリング調査は2017年8月～10月に一人1時間～2時間程度行った。

	性別	年齢	属性	
1 NSさん	男性	75歳	塩見出身	館山市で銀行職員として働いていた
2 MSさん	男性	67歳	塩見出身	館山市で市役所職員として働いていた
3 TIさん	男性	74歳	塩見出身	退職後東京から塩見に戻ってきた
4 FIさん	女性	82歳	塩見出身	今の家には24歳の時に嫁いたできた
5 TIさん	男性	60代	塩見出身	今の家は実家から分家してから所有していた元畑に建てた
6 HIさん	男性	50代	塩見出身	高校のときに塩見を出て、現在も東京で暮らす
7 SFさん	男性	60代	移住	22年前に夫婦で塩見に移住、現在息子も一緒に暮らす
8 SKさん	女性	60代	移住	36年前に夫婦で塩見に移住

図 4-1 ヒアリング調査対象者一覧

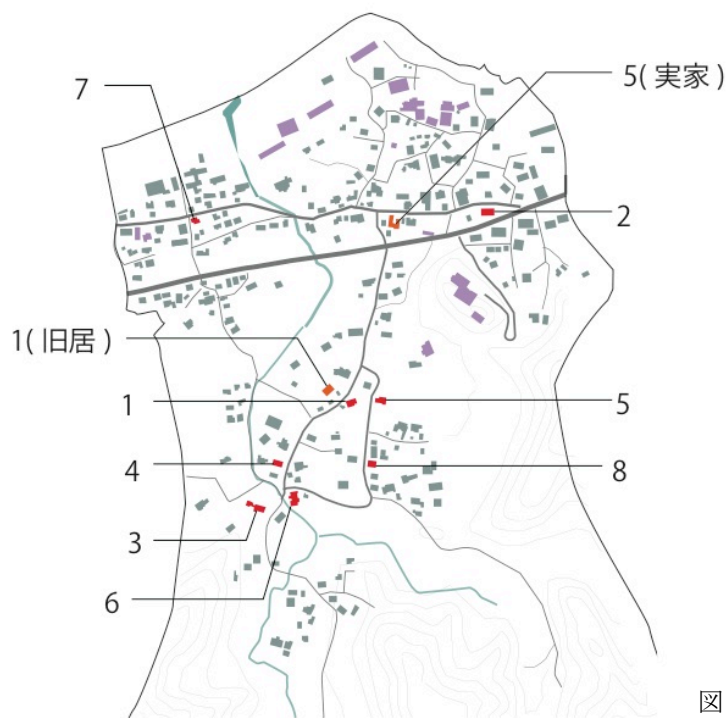


図 4-2 ヒアリング対象者居住地

ヒアリングの調査は、大きく【住宅・暮らし】、【生垣】の2つについて行った。

【住宅・暮らし】は、ヒアリング対象者の昔の暮らしや家の構え、外構の様子、改築の有無などについてヒアリングした。

【生垣】については、さらに A.生垣の設置理由 B.生垣の管理 C.生垣にまつわるエピソードについてとした。A.生垣の設置理由については、自宅の生垣の設置理由、現在生垣にどのような効果を期待しているか、どのような使われ方をされたかを調査した。B. 生垣の管理 については、幼少期など茅葺き民家での暮らしのときの生垣の管理と、現在の生垣の管理をどのように行っているか、なぜ生垣の管理を行うのかなどを調査項目とした。C. 生垣にまつわるエピソード は、生垣への印象や思い出、また周囲の民家の生垣についてなどを自由に語ってもらった。

またヒアリングの内容には、自分の住宅の囲いに関するものだけでなく、周囲の家の情報も含まれたため、これらは【周囲の民家について】として同一項目にまとめている。その中でも特に生垣に関するものについては同様に A.生垣の設置理由 B.生垣の管理 C.生垣にまつわるエピソードで項目を分けた。

以下に 8 人に行ったヒアリングの結果を示す。

ヒアリング結果1

N・Sさん(男性・75歳)：塩見出身

～住宅・暮らしについて～

- ・ 屋号は「ゴンジロウ」
- ・ ゴンジロウの今の建物は、大正時代にはあった。敷地自体はもっと前からあったと思う。
- ・ 門は昔からあった。昔は2mくらいの高さの石積みの門があった。扉はなかった。
- ・ 今の家は持っていた畑の一部に建てた。ゴンジロウを建て替えようかと考えたが、建て替える間に住む場所に困るので畑に新築し、ゴンジロウはそのままにした。
- ・ ポストはなかった。40年くらい前、ゴンジロウの向かいに新居を建てたときにポストを設置した。
- ・ 4～50年間に石柱と木の観音扉を設置した。
- ・ 鍵は今も開けたまま出かけることが多い。
- ・ 昔母がゴンジロウで住みながら民宿をやっていた。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 生垣は昔からある。家を建てた頃からあったのではないかな。多分100年は経っている。
- ・ 昔は茅葺き民家ばかりだったから、防風と火事を防ぐためだったと思う。
- ・ 茅葺きの家はすきま風がすごいから、風を防いで少しでも暖かさを保とうとした。
- ・ 南側隣家との敷地境界にある生垣はどちらが建てたものかわからない。共有しており、互いに自分の家側を管理している。地所は向こうの敷地。昔から高い(3-4m)。
- ・ 家(新居)の裏にある竹藪は見栄えが悪いので切ってしまいたいけど、風よけがなくなると困るから仕方なく残している。
- ・ 裏庭に境界を示すために高木を植えていた。裏に家が建ってから(1970年代)、境界部をコンクリートブロックで境界線にした。

B.生垣の管理

- ・ ゴンジロウの裏は竹林ではなく、元々は大きな木が境界部に植わっていた。西側隣家(ゴンジロウ裏側)が建ってから木をキッチンと伐採するようになった。それまでは自生するままに生やしっぱなしにしていた。
- ・ 管理するのに高さが高いと大変なので1mくらい詰めた。(新居)
- ・ 生垣は1年に1回くらい自分で刈っている。

C.生垣にまつわるエピソード

- ・ 畑には2-3本太いマキの樹が昔からあった。中国人が買いに来たが、お金に困っていなかったのので売らなかった。

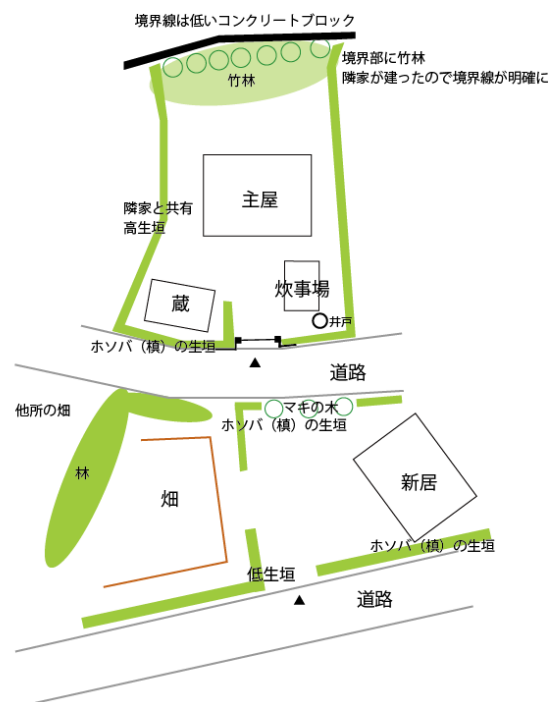
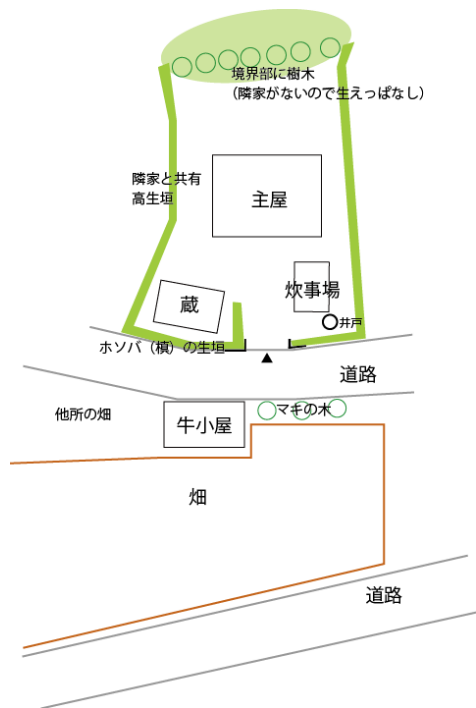
～周辺の民家について～

A.生垣の設置理由

- ・ 今生垣がある家は昔からあるところ。
- ・ 道路はさんで向かいの I さんの家も子どもの頃から生垣がある。

B. 生垣の管理

- ・ ゴンジロウの北側となりの家の人は今松戸に住んでいるが月 1 で管理に来ている。
- ・ ゴンジロウ含めて北側は 4 軒並んで空き家になっている。



ヒアリング結果2

M・Sさん(男性・67歳): 塩見出身

～住宅・暮らしについて～

- ・ 江戸時代の宝暦の頃から代々ここに住んでいる。
- ・ 父親が船乗りだったので、昔は母・自分・妹の3人で暮らしていた。
- ・ 昭和33年に古い家を改築して今の家を建てた。その後増築などしている。
- ・ 家は道路より一段低い位置に建っているが、これは風よけのために先祖が地面を掘り家を建てた。
- ・ 敷地内には畑が昔からずっとあった。フラワーラインができた際に道路で敷地が分断された。
- ・ 入り口には昔から今まで門はない。塩見には門をつくる格式の高い家はほとんどなかった。
- ・ 子どもの頃はポストも表札もなかった。インターフォンは昭和40年代頃につけた。
- ・ 昔は鍵はかけないで出かけていたが最近はお出かけのときは鍵をかける。塩見で空き巣の被害は聞いたことはない。
- ・ 家と敷地が大きくて管理が大変、収入に見合わないので100坪くらいでいい。今は草取りなど維持管理に時間を取られる。
- ・ バブル期は坪60万でフラワーライン向かいの畑を買いにきたが売らなかった。土地を売ってそのお金をもとで民宿を始めるうちが多くあった。多いときは塩見にも20軒くらい民宿があった。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 屋敷林は「トーチ」と呼んでいる。
- ・ 屋敷林は先祖が植えたというより、家を建てる際に周囲に樹林を残して風よけにした。
- ・ 小学生の低学年くらいまでは屋敷林から燃料(薪)を調達していた。
- ・ 昔は家の周囲は屋敷林や竹林で、今あるマキの生垣は母が神社のマキから種を拾ってきて育てた。
- ・ 昔は庭には植木はないが果物の木があった。それ以外はあけておいて農作物を干していた。
- ・ 西側は生垣をつくる前、隣家との境は雑木林になっていた。
- ・ 屋敷林は見栄えが悪いので生垣に変えた。綺麗な見た目の生垣は良い。綺麗にすれば周囲の印象にも残る。
- ・ 生垣を植えるにあたって、屋敷林をなくしていった。北側(海側)は竹垣(自生)になっている。表(フラワーライン沿い)の生垣も元々は竹林(自生)だった。
- ・ 西側の生垣の椿は家内が植えた。
- ・ 今生垣をブロック塀にするつもりはない。敷地が広くて風よけのために高さも必要なのでブロック塀にはできない。

B.生垣の管理

- ・ 生垣の剪定の時期は塩見だと秋～冬が多い。成長が遅くなってから。
- ・ 生垣の剪定は井上造園に頼んでいる。14万/年間かかっている。今は年金生活なので生活を

圧迫している。

C.生垣にまつわるエピソード

- ・ 入り口にある剪定された幹の太いマキの生垣だけは古くからある。樹齢2～300年か？中国人が1本300万円で買いにきたが、母が大事に育てていたものだったので売らなかった。

～周囲の民家について～

- ・ ゴンジロウは塩見の御三家と呼ばれる資産のある家だった。
- ・ 蔵は資産のある家にだけあった。(ゴンジロウ)
- ・ 塩見は後継者のいない家が多い。うちもどうなるかわからない。

A.生垣の設置理由

- ・ ゴンジロウは昔から生垣も門もあった。(他ではほとんどなかった。)
- ・ ゴンジロウの裏は昔みかんや柿が植わっていた。
- ・ 旧道はさんで向かいの家は昔お店をやっていた。お店をやめて建物を壊してから生垣とブロック塀(道路側にブロック塀、家側にマキの生垣)、門をつくった。
- ・ 東側隣家には名主さんが住んでいるが、今ある生垣はおじいさんが植えたもので、昔は生垣はなかった。
- ・ 塩見の高い整形の生垣のあるHさんのうちはそれまで屋敷林に囲まれていたものを今のご主人が生垣を植えた。
- ・ 周囲の民家は屋敷林に囲われている家がほとんどだった。マテバシイが植わっていた。
- ・ 昭和30年以降、屋敷林から生垣にする家々が出始めた。

B.生垣の管理

- ・ フラワーラインはさんで隣のKさんの家は今生垣があるが、今のようなマキの生垣はなかった。今は剪定を井上造園に頼んでいる。
- ・ Tさんの家は入り口に太いマキの樹が植わっている。昔はしめ縄を巻いていた御神木。昔は生垣はそんなに綺麗にしていなかった。
- ・ 昔は農業が忙しくて手入れ等ができず、そのまま自生するままに周囲に屋敷林を持つ家が多かったのではないかな。
- ・ 昭和30年以降、屋敷林から生垣にする家々が出始めた。

ヒアリング結果3

T・Iさん(男性・73歳)：塩見出身

～住宅・暮らしについて～

- ・ 屋号は「チョウエモン」「チョウエミ」
- ・ 昔の墓が残っているので、江戸時代には塩見に家があったと思われる。
- ・ 父親は工業船の船乗りで、船長だった。
- ・ 母親は畑をやってて、レタス・パセリ・菜花などを出荷していた。庭でも栽培していた。
- ・ 母親は田んぼもやってて、耕作面積は村で1、2を争うくらい。住民同士で助け合ってた。
- ・ 茅葺きの家を壊して燃すのも集落の皆でやった。家の人は軍手を出すくらい。男の人は漁に出ていて少ないから皆で協力するしかなかった。
- ・ 庭は今の半分くらいしかなく、畑だった。
- ・ 家が一段高くなっているんで、川が増水しても水はこなかった。
- ・ 集落の海側が津波の心配がある。
- ・ 鍵は昔は開けっ放しで出かけていたが、泥棒に入られてからは閉めている。(狭いコミュニティなので)盗られたら犯人がわかる。それからは敷地内に人が入ってくるのを気にするようになった。
- ・ 家が船乗りで収入がキッチンと入ってきたので生活には困っていなかった。
- ・ 収入があり、家には女子供しかいないので昔から泥棒に狙われた。
- ・ ポストは子どもの頃から敷地入り口のところにあった。
- ・ 表札も昔から玄関のところにあった。
- ・ インターフォンは今の家を建てた時に玄関のところにつけた。
- ・ 今の家は35年前に建て替えた。その前はゴンジロウみたいな茅葺き民家だった。
- ・ 蔵はないが物置はあった。大正時代に建て替えてから茅葺き屋根から瓦屋根になった。
- ・ 家が貧乏だったので門はなかった。
- ・ 今の家にも特に門はいらないので設けてない。
- ・ 別荘の人に畑を貸している。別荘の人は毎週来て世話している。母が畑をやっていたところに来て、貸してほしいと言われたので貸すことになった。
- ・ 子どもは外で家を持ったので戻ってくる予定はない。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 物心ついたときから生垣はあった。いつからあるかはわからない。
- ・ 生垣は防風と延焼防火のためにある。昔は家が茅葺きだったから火事を防ぐ方が重要だった。今は防風のためにある。
- ・ 昔は風を怖がって生垣を高くした。今は家も立派になったから風も怖くない。
- ・ 家の南東側には太いマテバシイが植わっているが、これはじいさんが風よけのために植えたもの。伸びてきて家にかかるので切ろうとしたら父親にひどく怒られた。
- ・ 低い生垣は飾り、ぼろ隠し、入り口のかっこつけ、境界を示すためのもの。うちの入り口部分にも低い生垣がある。

- ・ 高さが必要なのでブロック塀にはしない。
- ・ 家の前の道路を建設する工事の際にも生垣は壊していない。
- ・ 敷地入り口に太いマキがある。西口にもある。
- ・ 表の２段になっている生垣は、昔は牛を飼っていて表に繋いでいたら禿げてしまったので新しいのを植えた。
- ・ 裏の生垣は昔は竹藪になっていた。竹藪を刈り取る際、そこにも生垣が生えているのを見つけたので昔は生垣だったが、竹に負けてしまったのだろう。
- ・ 裏の家との間には畑の境界の生垣が昔からあるが、誰が植えたのかは分からない。

B.生垣の管理について

- ・ 生垣を綺麗に整えるようになったのは自分の代から。
- ・ 入り口のマキの太い木は高さが高いため、3、4年に一回井上造園に剪定を頼んでいる。1日6万円でマキと他の樹も剪定してもらう。
- ・ マキの生垣は剪定しないと枝がおかしくなるので年2回切らないと隙間ができてしまう。剪定すると密な生垣になる。
- ・ 生垣をほっとくと生垣の中に蔓が伸びてマキをダメにしちゃう。隙間だらけだとカッコ悪い。
- ・ 生垣は昔は2回刈ってたけどお金がかかるので今は暮れに1回だけ。
- ・ 塩見は皆井上造園に剪定を頼んでいる。
- ・ 人が住まなくなっても外注して生垣の管理を続けている人はいるけど、自分の家がそうになったら住んでもいないのに生垣刈っても仕方ないからそのままにしようかな。

C.生垣にまつわるエピソード

- ・ 太いマキはバブル期に中国からバイヤーが1本10万円で買い取りに来たが売らなかった。
- ・ 生垣は線で境界が出ない上、動いて境界が分からなくなるので土地を売る時に問題になる。
- ・ 30歳くらいまでは境界のところに竹がたくさん生えていたが、バブル期と地を売るため、敷地境界に杭をうつので竹藪を伐り、生垣だけが残った。
- ・ 裏の家は生垣の管理を自分に押し付けたので、ずっと生垣の管理をしていた。管理をしていたから自分のうちの生垣だと思っていたのに、いざ土地を売るというときに向こうが生垣の所有が自分にあると主張してきてめめた。
- ・ 木は敷地境界から3尺離して植えると昔から言うので、向こうの生垣だと認めると更に3尺土地をとられてしまうので譲れない。
- ・ 今の家主と木(生垣)の中央を境界にすることを決めた。生垣は大事な境界になっている。
- ・ バブルの前からどこに杭(境界)を打つかは問題になっていた。

～周辺の民家について～

- ・ ゴンジロウはお金持ちだったので昔金貸しをしていた。
- ・ 畑を持っているうちは古くから塩見にいる家。
- ・ 塩見では空き家は最近増えてきたけど完全に崩れちゃったところは全然ない。あっても倉庫とかだけ。
- ・ 空き家が森に飲まれちゃって見えなくなったところが1軒あるけど、もう竹林と一体化していて普段は全然気にしない。

B.生垣の管理について

- ・ 近くの別荘の人が自分の家の前に家を建てられるのが嫌で、家の前の土地も買い占めた。今は施設に入って空き家化しているが、生垣の管理は植木屋に発注しており、今も生垣の美観を保っている。
- ・ 空き家になっても近所の人が管理していることが多い。

～土地の境界にまつわるエピソード～

- ・ 裏の家は土地を売ったときにだまされてもめた。敷地の境界は土地を売るときにしか問題にはならない。
- ・ 昔の人は田んぼのところに細い柳の木を線のように植えて境とした。あぜ道は崩れて境がわからなくなるので。
- ・ 隣の家が土地を宅地として売りたいが、道路に接していなかったので、売りたくなかったが、通路のための土地を細く売ってあげた。
- ・ 他所から来る人に困るのは、細い道に接する敷地の境界ギリギリまで構造物(畑を覆う網など)を建ててしまい、車などが通行しにくくなること。思いやりがない。
- ・ 所有していた畑の前に別荘ができて、他の人の土地を通らないと畑に行けなくなったので、道を使わせてもらう代わりに畑の一部をゆずった。
- ・ 畑の境界ピッタリにブロック塀をつくったら、向こうが際に木や竹を植えて、根がこちらに入ってくるようになった。こちら側の根は自分切ってくれと言われて困っている。

ヒアリング結果 4

F・I さん(女性・82 歳)：塩見出身

～住宅・暮らしについて～

- ・ 屋号は「シンジロウ」
- ・ 昔道路は1軒くらいの幅しかなかった。工事のときに皆地所を寄付した。
- ・ 門はずっと昔からない。門がある家はほとんどなかった。ゴンジロウ他数軒だけ。お金がある家しか門をつくれなかった。
- ・ 入り口のコンクリート舗装をしたのは10年くらい前。
- ・ 昔前庭で米のもみなどを干した。
- ・ 今のうちを建てたのは15年くらい前で塩見のSさん(大工)が建てた。その前は茅葺きだった。そのとき空き家だったゴンジロウを除いて集落内で最後の茅葺き民家だった。
- ・ 民宿はやらなかった。バブル期も土地は売らなかった。
- ・ 娘と息子がいるが二人とも塩見を出た。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 60年前表の道路ができる前は太いマキの生垣があったが切った。何百年か前のものじゃないか。
- ・ 表は生垣だったが、昔は裏は竹藪で、ゴミ捨て場として使っていた。40年くらい前に生垣にした。
- ・ 隣家との境の生垣も昔からあった。

B.生垣の管理について

- ・ 隣家との境の生垣は、家の奥の生垣と同じ高さだったが親が手入れのために低くした。
- ・ 生垣は昔からあったが特に刈ったりせずそのままにしていた。
- ・ 今の生垣を植えたのは道路ができから、自分が植えた(50年ほど前)。生垣を整えるようになったのはその頃から。
- ・ 10年くらい前まで生垣は鋏で自分で刈っていた。
- ・ 今は井上造園に頼んでいる。年間5万5千円。あまり生垣が高くないので他に比べて安い。
- ・ 昔はもっと生垣が高かったが管理費が高いので低くした。

～周辺の民家について～

- ・ 自分のうちの囲いは生垣だったが、他所は違うところも多かった。向かいのYさんの家は昔は石垣だった。道路を作る際に石垣を壊したあと、マキの生垣をつくった。Yさんの家も井上造園に外注している。

ヒアリング結果5

T・Iさん(男性・60代)：塩見出身

～住宅・暮らしについて～

- ・ 実家の屋号は「タロゼミ」
- ・ 昔は茶店をやっていた。
- ・ 実家は塩見では1番古い家で、まだ集落に6、7軒しかないときからあった。
- ・ 実家は1500坪の屋敷があった。
- ・ 善栄寺の土地は元々自分の家の土地だった。鳳凰寺が燃えて善栄寺に移ったのでそれから区に渡した。
- ・ 門番をしていたI・Iさんに地所分けした。
- ・ 実家の敷地入り口には扉付きの石柱が昔からあった。
- ・ 車庫は20年前までうちの中(生垣の中)にあったが、工事して外側に車庫をつくった。その際に表側の生垣を壊して門をつくった。
- ・ 庭ではたまにホームパーティーやウクレレ教室をしている。
- ・ 住宅の鍵はかけていない。住民の方が周りを見てくれる安心感がある。
- ・ 今の住宅は自分のあとは息子が継いでくれる。
- ・ もし将来歳をとって家を離れることがあったら、自分だったら空き家にする前に売って手放す。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 屋敷の頃には生垣と通り門があった。
- ・ 実家には子どもの頃から生垣はずっとあった。
- ・ 塩見では防火・防風のために生垣をつくっている。家が茅葺き屋根のときは防火がメイン。家を建て替えてからは防風のために植えた。
- ・ 生垣は昭和47年に今の位置に住宅を建てたときに植えた。

B.生垣の管理について

- ・ 生垣はお祭りの前(神様来るから)のお盆と正月前に刈っていたけど、最近だと冬に1回だけになっている。
- ・ 生垣は自分で刈っている。この前脚立を使っていたら落ちて腕の骨を折った。

～周辺の民家について～

- ・ 塩見のルールや区費について、移住してくる人への説明を市に依頼したが無視されている。区費を払わない人がいるがそれは別荘の人。

A.生垣の設置理由

- ・ Tさんちの生垣は7～80年前におばあさんが植えた。

B.生垣の管理について

- ・ 住んでた人がなくなって、子どもが塩見の外に出てしまったところでは、子どもが生垣の管

理を近所の人に頼んでやってもらっている。近所との付き合いがちゃんと出来てるからそれができる。別荘とかはそのまま放置されているところが多い。

- Kさんは向かいの家の生垣の管理を頼まれてやっている。向かいの家はそのうち戻ってくるつもりがある。

ヒアリング結果6

H・I さん(男性・50代): 塩見出身、現在東京で暮らす。実家が塩見にある。

～住宅・暮らしについて～

- ・ 47 年前くらいに改築した。
- ・ 子どもの頃は母親が前庭で粃を干したり、梅干しを干したりしていた。
- ・ 父が盆栽が好きだったので、蘭などを育てる温室があった。今も弟がプランターなどを置いて色々育てている。
- ・ 庭が広がったので中でキャッチボールができた。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 敷地入り口にあるマキは今は上まで完全に空いているが、昔は上の部分が繋がっていて、長屋門のような形状だった。

B.生垣の管理について

- ・ 入り口の生垣は今(3m)よりも 1 m ほど高かったが、3～40 年ほど前、父親が身体を壊したことを期に高さを詰めた。
- ・ 生垣は自分が子どもの頃から父親が両手ばさみで綺麗に刈り込んでいた。
- ・ 父親が刈れなくなってからは剪定は外注している。

C.生垣にまつわるエピソード

- ・ 子どもの頃はマキの実をおやつに食べていた。
- ・ 子どもの頃は弟と近所の子どもと一緒にマキの垣根の中に入って上に上って遊んだ。
- ・ どの家の垣根も高かった。

ヒアリング結果 7

S・F さん(男性・60代)：22年前に塩見に移住

～住宅・暮らしについて～

- ・ 屋号は「ヤゴベ」
- ・ 平成8年に不動産を通して購入した。購入してから改築などはしていない。
- ・ 塩見では土地を持っている人があまり売らなかったの、不動産を通さないと家を買わずらい。家や土地を売る人は継ぐ人がいなくて仕方なく手放した人。
- ・ 今の家は昭和45年に塩見の大工が建てた。元々電気屋さんの会社が別荘として所有していた。その前は塩見の住民が住んでいたが家を継ぐ人がいなくて手放した。
- ・ 海が近いので家が外から直接風呂に入れるつくりになっている。
- ・ 昔ここには塩見小学校が建っていた。元々ここに住んでいたヤゴベ(屋号)さんがこの土地を持っていて小学校にした。
- ・ 息子が敷地内に自分の部屋(小屋)をつくって暮らしている。小屋と建てる前は小さな畑と木があった。
- ・ 畑は前に住んでいた住民がやっていたもので、越してきてすぐは畑もやっていた。
- ・ 家は2面道路に面しているが車が通らないので静かでよい。
- ・ 海が近いので西風が強く、夜波音がうるさい。耳栓をしたこともある。
- ・ 出かけるときは鍵をかけてでかける。
- ・ 東京に暮らしていたときはいつも雨戸を閉めるようにしていたので、塩見でも同じようにしていたら、近所の人に「何かあったときに助けないよ」と言われて開けておくようになった。
- ・ 塩見は岩盤が固いから地震が来ても全然揺れないから地震の心配はない。海側は津波が怖い。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 入り口の垣根は買ったときからあるもので、今より2～30cm高かった。
- ・ 潮風で車などがダメになってしまうので、風の直撃を防ぐために生垣は残している。

B.生垣の管理について

- ・ 脚立に乗らないと切れない高さであったので詰めた。高さを詰めても特に変わったことは無い。
- ・ 生垣は自分で1年に2～3回ちょこちょこ切っている。
- ・ 庭の木は買った時からあるが、切るのが面倒くさいのでそのまま自生させている。

ヒアリング結果 8

S・Kさん(女性・60代)：37年前に塩見に移住

～住宅・暮らしについて～

- ・ 昭和55年に建てた。元々畑があった土地なので周囲も含めて一面更地だった。同じくらいの時期に周りの家も建ちはじめた。
- ・ 昔はお金がなくて小さな家だったが、不便だったので仕事をやめたタイミング(13年前)で洗面所やお風呂を広くし、2Fを増築した。
- ・ 2年ほど前にリフォームしてキッチンの場所を移動させた。
- ・ 塩見に移住してきたときから家の真横の畑を近所の人から借りて畑をやっていたが、貸してくれている人が体力的に広い畑を管理するのが大変になってきて「もっと広くやって」とお願いされて、今は3/4くらいの面積をやっている。
- ・ 近所の他の家は皆跡取りのことを気にしているが、うちは気にしていない。子どもには好きにしていっていいと思っている。
- ・ 昔は庭に趣味のバイクを置くための倉庫をつくった。20年以上前に大型バイク用に倉庫を建て替えた。

～生垣について～

A.生垣の設置理由

- ・ 生垣は今は北側を一面だけ残しているが、前は入り口側も生垣にしていた。生垣の高さは今よりも30cmほど高かった。
- ・ 塩見は風よけのためにマキをよく植えていたので新しい家をつくったとき(35年前)に生垣の囲いを設けたが、お金もかかるのでリフォームするとき(13年前)に駐車場と花壇に変えた。
- ・ 周囲に家があるので生垣をなくしても風が強いのはあまり気にならない。

B.生垣の管理について

- ・ 北側の生垣は旦那と息子が切っている。
- ・ 向かいの家は人が住んでいないけど生垣の管理を頼まれているのでついでに切ってもらっている。

4-3. 生垣の機能と形状

生垣の設置理由や利用方法、生垣にまつわるエピソードなどの項目から、生垣に期待された機能と、果たした役割について考察した。生垣の機能は1章で整理された近代以前の11*の機能を元にし、ヒアリングの結果から抽出された生垣の機能【防護】、【境界領域(バッファ領域)】、【境界】、【仕切り・目隠し】、【資材調達・生業空間】について、それぞれの生垣の特徴を整理した。

4-3-1. 防護

生垣の設置理由として、ヒアリング対象者全員の共通認識であったのが、「防風」機能であった。昔集落の多くが茅葺き民家で会った頃(～1960年代)には、防風以上に、延焼を防ぐ防火としての機能が重要視されていたという。また昔の家のづくりは冬寒く、風よけの生垣は防寒の意味でも重要だった。家が茅葺き民家でなくなってからは、防火や防寒をあまり気にしなくてよくなった(N.S、T.I)。

マキの生垣が防風のために設けられたものだという共通認識がある一方で、周囲の家が風よけの役目を果たすために、管理費用を加味して生垣を膝下高さの花壇に変えた S.K さんの例(機能の代替)や、管理の都合上高さを近く詰める N.S さん、H.I さんの例(機能の縮小)が見られるなど、生垣に求められる防風機能の重要性が薄れてきていることが指摘される。

4-3-2. バッファ領域

生垣が持っている幅のある境界領域としての機能の存在は、建築の増改築と生垣との関わりの中に見られた。T.I さんは、現在住む住宅を増築する際に、裏の竹藪を切って住宅の増築面積に充て、その際厚みのあった竹林をマキの生垣に作り替えた。また F.S さんは、家の裏部分に竹林と雑木林(屋敷林)があったが、物置を新設した際にそれらを刈って建築面積に充てた。宅地の拡大をうけとめるバッファ領域として存在していた生垣(屋敷林)は、必要に応じて刈り込まれ、線状に姿を変えていた。

4-3-3. 境界

バブルの頃になると、塩見では田畑や宅地の売買が頻繁に起こった。その際に問題にな

* 生垣の機能…「防護」、「境界領域」、「境界」、「結界」、「仕切り」、「目隠し」、「完全な目隠し(塀)」、「象徴」、「防犯」、「資材調達・生業空間」、「鑑賞」

ったのは敷地境界の場所で、この頃には自然樹形の樹木などを境にしていたものには敷地境界部に杭が打たれたりコンクリートブロックに代替されるなど、敷地境界が固定化・明確化された。

塩見では、昔ながらの生垣は住宅敷地の境界線上の地面に直接植えることが多く、生垣自体の成長や地盤のずれで境界自体を動かしてしまうことがあった。生垣の境界線としての機能を維持するには樹形のこまめな管理が必要で、持ち主が不明の場合は共有し、共同で管理した(N.S、T.I)。こうした共有を嫌い、隣家の生垣の前に更に生垣を設けている例もある。

4-3-4. 仕切り・目隠し

生垣は住宅の囲いとして家のプライバシーを保つだけでなく、敷地内での空間を仕切る役割を果たしていた。F・Iさんは、家の裏の竹藪をゴミ捨て場として使用していたが、1970-80年代頃に生垣に変えた。また住宅敷地内には、外トイレや倉庫と主屋のある空間を隔てる生垣が設けられ、空間を限っている例が見られた。現在もこの垣根は残っている。

4-3-5. 資材調達・生業空間

塩見では、1960年代頃までは、多くの住宅では炭を燃料としていた。M.Sさんが小学生低学年の頃は、家の周囲は屋敷林が囲っていて、そこで落ち葉や薪など日々の燃料を調達していた。また昔は庭には観賞用の樹木などは生えていなくても、カキやみかんといった果物は植えられていた。1970年代に入ってから屋敷林で燃料を調達することもなくなり、屋敷林の見栄えを気にして生垣に植え替えたり、竹林を刈ったりした。(N.Sさん、M.Sさん)

また塩見ではヒアリング調査対象者の親世代(1960-70年代頃)には、庭を農作業空間として使うことが多く、生垣に囲まれた前庭空間は大切な生業空間であったという。(T.Iさん、M.Sさん)

4-4. 生垣の維持管理

4-4-1. 生垣の維持管理の変遷

塩見区内において、生垣の刈り込みが一般的になり整形な生垣が多く見られるようになったのは、1970年代頃からである(M.S、T.I、F.I)。M.Sさんによると、この頃まではみん

な農業が忙しかったり、漁業で家にいないことが多かったので、生垣の管理はおざなりになっていたという。会社に務める人が増えたり、親が退職して時間ができた頃(ヒアリング対象者の親世代)になると、住宅囲いの美観を気にして刈り込みを行うようになった。現在も空き家以外のほとんどの生垣のある民家で、整形な生垣を見ることができる。

また近年、3m を越えるような高生垣は、刈り込みがしやすいように高さを詰められる傾向にある。

4-4-2.維持管理の課題

生垣の維持管理は、住民が自分で行っている人と、井上造園に外注する人とで二分される。生垣の管理は、理想は1年に2回、空き頃と冬に行われるのがよいとされるが、管理の大変さから1年に1回、11月～1月頃に刈り込む家が多いようである。外注する場合の費用は、1日5万～10万前後かかり、高生垣を設けている敷地の広い家(M.S)では1度の剪定で14万ほどかかり生活を圧迫している。

T.Iさんは「塩見は農業をやっていて手先の器用な人が多かったから、自分で刈り込みを行う人が多かった。」と述べるが、近年塩見区では高齢化が著しく、これまで自身で刈り込みを行っていた人も身長を越す高生垣の刈り込みが年々厳しくなっているという。

4-4-3. 維持管理を続ける理由

生垣は管理が大変で、それは高齢化していく集落で深刻な問題になりつつある。一方で塩見区では、親や祖父母が植えて立派に育てた生垣を自分で絶やしてしまうのは申し訳ない、という思いから生垣は放置されることなく丁寧に手入れされている。生垣は継続的な手入れでその美観が保たれるものである。生垣の美しさはその家の社会状況を推し量るものでもあり、住民は生垣を荒れたまま放置することに対し「近所にみっともない」と抵抗を示すようである。またこうした思いは、塩見を出て行く息子世代にもあるようで、近所の住民に空き家になってしまった実家の生垣の管理をお願いしている。このように、塩見においては「景観を継承すること」自体が目的となってきた。

4-5. 生垣の変化が起こった時期

以上より、生垣の変化が起こった時期とその原因についてまとめると以下のようになった。

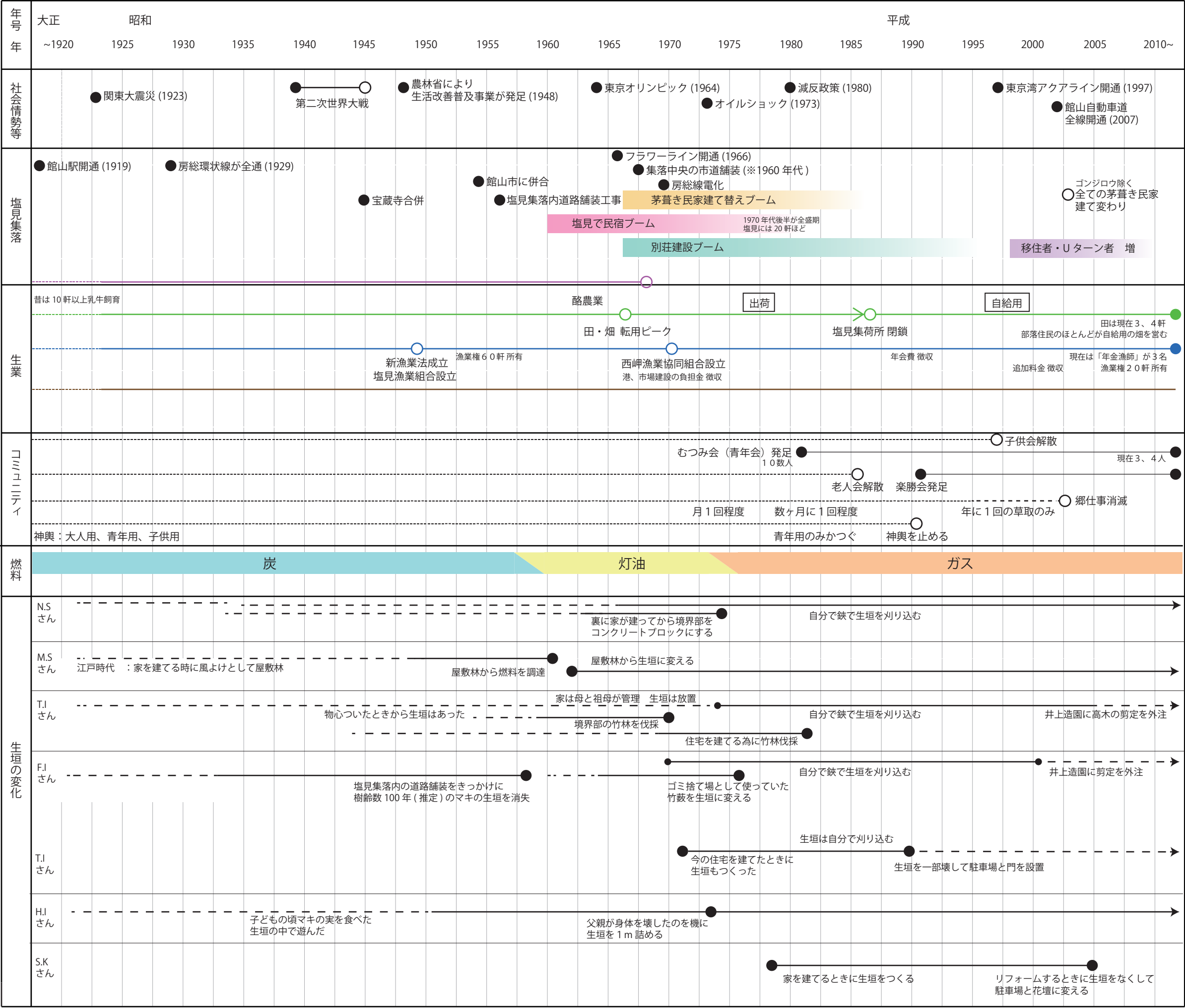


図 4-3 生垣の変化とその要因

1960 年頃から 1980 年頃にかけて、住宅の増築や周囲の民家との関係から、屋敷林から整形な生垣に変えたり竹林を刈ったりするような、生垣の変化が多く起きていたことがわかった。またこうした変化に伴い、生垣が本来持っていた価値の代替と消失が起こっていることがわかった。

4-6. 生垣景観の価値

4-6-1. 原風景としての生垣景観

塩見においては、幼少期から慣れ親しみ(H.I)、「いつからあるかわからない」生垣が、「なくなることは考えられない」原風景として人々に認識されていた。生垣自体の機能の代替と消失が起こる中で、生垣の持つ価値は、機能的価値からシンボリックな価値へと転換してきたと言える。

4-6-2. 生垣を「継承すること」の価値

生垣景観は、自然環境との調和結果として生み出されたものとしてではなく、生垣景観を「継承すること」自体に価値が見いだされ、住民に維持管理の困難を強いながらも辛うじて今日まで受け継がれてきたものである。生垣そのものよりも、景観構成要素としての生垣の価値が認識されるようになってきた。

4-7. 小括

本章では、1 章で整理された住宅の囲いとしての生垣の機能、2 章の生垣の集合としての農村景観の実態、3 章で明らかになった館山市塩見区での集落空間の変遷を踏まえ、生垣景観に影響を与えてきた直接的な要因と、今日まで生垣景観が継承されてきた理由について把握した。

生垣景観に影響を与えた要因には、生垣の家を防護する機能や、堆肥や薪調達のための樹林帯、屋外作業スペースを囲うという重要な機能の代替と喪失が起こったこと、以前はなかった生垣の美観への欲求の高まりなどが挙げられた。住宅の改築や周囲の住宅との関わりの中で生垣の形状も変化した、それ以前は、2 章で確認された集落ごとの生垣の微

細な特徴が、塩見区内でも見られたであろうことが推察された。

生垣の持つ機能が急速に失われ、生垣の形状は変わりつつもなお、塩見区内で生垣の景観が維持されてきたのは、継承すること自体の意味、機能的価値に代わって景観構成要素としての生垣の価値が認識されるようになったからだとわかった。

参考文献

- ・ 多田井幸視(2002)「住まいと民俗-住意識の変容-」，岩井書院
- ・ 鈴木成文(1999)「住まいを読む ―現代日本住居論」，(株)建築資料研究社

終章

終章

5-2. 結論

安房地域においては、人びとがこの地に住み始めて以来、生垣は機能を変化させながら当たり前存在してきた。人がそれぞれその土地の自然条件を微細に感じ取り、生垣で家を囲った帰結として、調和のとれた美しいと感じさせる生垣景観、すなわち「生きられた景観」を生んだことがわかった。こうして、世代を超えて続いてきた囲いとしての生垣の連なりが成す農村景観は、その土地の気候風土や集落の成り立ちを知る手がかりを与えるものであり、それを守ろうとする意識につながっている。

また、塩見地区における調査から、1970年代以降が、集落空間にとっても、生垣にとっても大きな転換期だったことがわかった。人と自然との関わりの微細な違いを反映した生垣の個性のみならず、生垣の持つ機能が急速に失われ、その存続が危ぶまれた。しかし、なおも生垣が特徴的な景観を辛うじて維持できているのは、継承すること自体の意味、機能的価値に代わって景観構成要素としての生垣の価値が認識されるようになったことによる。今後、調和の取れた生垣景観を保全していくためには、時代とともに移り変わってきた生垣の価値を共通認識とし、意識的に景観構成要素として生垣を保全しようとする欲求を支援するしくみが求められるのではないかと。

5-3. 今後の課題

しかしこうした保全のあり方には、同時に限界も感じる。農村集落における生垣は、人と自然環境との関わりの系譜の中で機能的に必要とされて無意識に残してきたものであるから、その時の必要によって姿を変えるのが当たり前であり、残す側にとって負担を強いるものではなかった。構成要素それ自体が持つ価値よりも、結果的に生み出された「景観を美しく保ち続ける」ことに価値が見いだされている今、景観の保全は人に不自然な凍結を強いることも事実である。こうした中で今後は、景観の維持によって生み出される価値を明らかにし、どのように共通認識としていくかが課題となろう。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、お世話になった方々にこの場を借りて感謝と御礼を申し上げます。

私が千葉大学に所属していた学部4年生の頃から、3年間という長い間研究指導してくださった岡部明子先生には、いつもなかなか研究の歩みが進まず、方向性の定まらない私を最後まで見放さずご指導してくださったこと、大変感謝しております。提出の間際には、貴重なお時間を割いて、何度も方向性を正していただきました。暖かいご指導、本当にありがとうございました。また修士1年の頃には、館山市塩見における館山プロジェクトの学生統括を任せてくださり、実践的な活動を通した学びの機会を与えてくださいましたこと、心より感謝申し上げます。岡部先生から頂いた学びと新しい視点を、今後の活動の中でも活かしていきたいと思います。

副指導教官の福永真弓先生には、いつも優しい励ましと、社会学的視点からの的確なアドバイスを頂きました。福永先生に頂いたアドバイスのおかげで、自分の中で決めかねていた研究の方向性を修正することができました。心より感謝申し上げます。

そして修士1年からのフィールドワーク、論文のための調査を快く受け入れてくださいました館山市塩見の皆様に、心からの感謝と御礼を申し上げます。暖かいお言葉と貴重なご意見をたくさん頂きました。特に活動のためのフィールドとして、「ゴンジロウ」を岡部研究室に貸してくださった鈴木信雄さん、様々な活動の中心的人物として動いてくださりご指導していただきました飯沼武さん、鈴木守さん、小金晴男さんには、大変お世話になりました。ありがとうございます。

また、本論文の調査にあたり、貴重なご意見をくださり、調査付き添いまでして頂きました和田修さんに心より感謝申し上げます。

最後に、一緒に様々な調査に取り組み、切磋琢磨した岡部研究室の皆様。居心地のいい研究室で、2年間楽しく過ごさせてくださいましたこと、深く感謝申し上げます。特に千葉大学の時から同期として研究活動に取り組んだ牧野くん、尊敬する平野先輩には、研究への姿勢をはじめ、多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

農村景観構成要素としての生垣の変遷と保全に関する研究

-館山市塩見区を対象として-

The Transformation of Hedge as the Components of the Traditional Rural Landscape
and its Conservation

-A case Study of on Shiomi, Tateyama -

学籍番号 47-166728

氏 名 加瀬 ひかり (Kase,Hikari)

指導教員 岡部 明子 教授

0 はじめに

0.1 研究の背景

住宅の囲いとしての生垣は、外敵や自然の驚異から暮らしと家を守り、敷地の境界線を示すものとしてつくられ維持されてきた。農村集落においては、こうして専ら機能的理由でつくられた生垣が連なり、結果的に調和のとれた景観を形成してきた。しかし、近年、生垣景観の劣化が顕著になるにつれて、生垣を地域に特徴的な景観構成要素として意識的に保全していこうとする社会的欲求が高まりつつある。

今後も、美しい農村景観の形成に求められる生垣を保全するためには、まず、どのような経緯で生まれ、人と自然環境の持続的な関わりの中で継承されてきたのか、今なぜ継承が困難になっているのかを知る必要がある。

0.2 既往研究

生垣(屋敷林)の保全についての研究は、限定された一地域においての実態調査(柳井・1994²⁾、近江・1992³⁾ 他)や、その変遷を明らかにする事例調査(小森・2013⁴⁾ 他)が中心で、生垣が気候風土によって違ったかたちをとり、機能を変化させつつも

維持されてきたのか、その変遷を解明しきれていない。

0.3 研究の目的

そこで、本研究では、生垣が特徴的な農村景観の今後の保全に資する知見を得るために、生垣の連なりが景観を形成している農村集落の多い安房地域を対象とし、集落毎に異なる景観構成要素としての生垣の立地特性を解明する。さらに、生垣景観を劣化させている事情を明らかにするために、ヒアリング調査を行なった。対象としたのは、暮らしが大きく変わった今日も生垣が特徴的な農村景観が認められる館山市見地区である。

本研究ではまず、1)住宅の囲いとしての生垣の発祥と変遷を歴史的に整理し、2)生垣景観の特徴を気候風土や地形立地等の集落的要因から明らかにする。その上で館山市塩見区を対象として、3)集落空間の変容や4)暮らしの変化の中で、人がどのように生垣景観を継承してきたかを明らかにする。そして生垣の現状と人の生活との関わりから、生垣景観継承のための課題を整理した。

なお本論では、生垣の定義は、額田(1984)¹⁾と同様に「生きている木を用いた垣

根」とし、形状や刈り込みの有無は問わないものとした。またこの生垣は特別な記載のない限り、厚みを持った樹林形状のもの(屋敷林)も含む広義の意味で用いる。

1 農村集落における生垣の歴史的変遷

外敵や自然の脅威から住宅を守る障壁物として、また土地利用の区分を示す境界領域として生まれた生垣は、その時代の暮らしと生業の必要に応じて機能や形態を変化させ、時代ごとに特色のある垣根文化を発展させていった。(図1)

人は、安心して快適に暮らせる空間を獲得しようとして、土地や自然に改変を加えるが、その結果として生み出される景観要素は造形的に調和し、美しい農村景観として現れる。生垣は、人と自然環境との関わりの表象にほかならず、その時代の必要に応じてかたちを変えながらも世代を超えて続いた「生きられた景観⁵⁾」を構成するものであることがわかった。

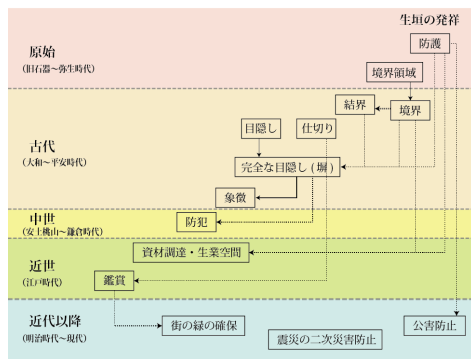


図1 生垣の機能の発展

2 千葉県安房地域における生垣の立地特性

2.1 集落の選定

生垣景観を育み、今日まで残してきた集落の特徴を明らかにするため、マキの生垣の連なりが特徴的な農村景観を形成している、千葉県安房地域の古代以前に成立した「自然発生的集落」を対象とし、生垣景観

の分布とその年代的変遷から、生垣の立地特性を分析した。

安房地域は718年に成立した旧安房国の範囲と定義し、対象とする集落空間の選定には、平安時代の行政区画である郷の名称を辞典『和名類聚抄』⁷⁾で抽出し、その地名を『角川日本 地名大辞典』⁸⁾から現在の場所を特定する方法をとった。これにより抽出された38の地域について、集落の地形立地、集落形状、集落内微高地等の集落の特徴と、生垣の関係について分析を行った。

2.2 安房地域の自然発生的集落の立地

安房地域の集落は、山地や丘陵地の山裾、海岸砂丘や扇状地などの低地微高地、または山間谷間に多く立地していた。こうした地域は水利が良く、地盤がしっかりしており、自然発生的集落は、人間の生息地に最適な条件を備えた地域が選ばれてきたことがわかる。

2.3 生垣の立地特性

生垣の分布を決定づける集落の地理的・社会的特徴についての考察より、以下のような生垣の立地特性が明らかになった。

a) 集落立地…山間谷間上流に位置する集落(鴨川市二子,館山市大井 etc.)では生垣は見られず、山地中腹～低地では広く分布している。

b) 集落形状…生垣の分布は集落形状によらず広く見られるが、列状に展開する高密度な集落(鴨川市前原,etc.)では生垣は見られない。

c) 生垣の形状…集落の微地形と風環境が住宅周りの生垣の出現位置と形状に影響する。

d) 生業…比較的敷地面積が小さくかつ高密度に展開する漁村集落(鋸南町吉浜,勝浦市興津 etc.)では生垣の分布は見られない。

以上のように、生垣の分布と形状は集落の微地形とそれによる自然環境に決定づけられ、集落ごとに個性ある景観を形成している。

3 千葉県館山市塩見区における生垣の変遷

3.1 館山市塩見区の概要

館山市塩見地区は、北方に館山湾を望む緩傾斜の山間谷間に形成された集落で、その集落立地は山地中腹の斜面地から海岸段丘までと、安房地域の自然発生的集落の中でも特に集落空間の多様性と生垣分布・形態が特徴的な集落である。

近年人口減少、高齢化が著しく、現在塩見地区の高齢化率は 56.7%に達している。一方、二地域居住や別荘地としても注目されており、居住者の内訳は新規移住者や二拠点居住者が 4 割弱となっている。冬期には「大西」と呼ばれる強い西風が吹くため、防災のためのマキの生垣が集落の伝統的景観を形成してきた。

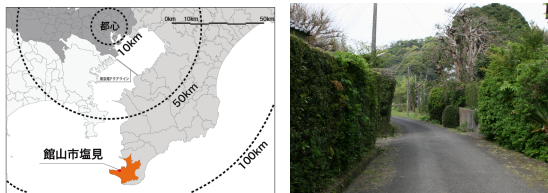


図 2 館山市塩見区の位置と集落景観

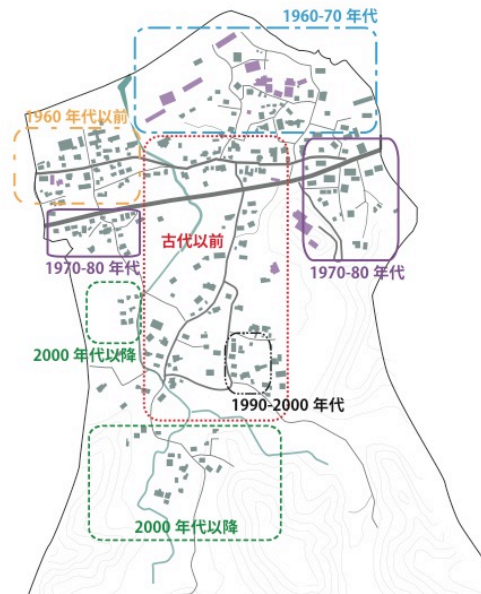


図 3 塩見集落における住宅地の展開

3.2 集落空間の変化と住宅の囲いの変遷

文献調査やヒアリング調査から集落空間の変容を把握したのち、画質が比較的鮮明で、住宅の囲いの識別が可能な 1961 年、1975 年、2016 年の航空写真と住宅地図から、住宅の囲いの変遷を調査した。(図 4)

1960 年代以前は立地に関わらず、ほぼ全ての民家が生垣に囲まれており、1970 年代頃までは生垣の残存率が高かった。

塩見区で集落空間が大きく変容した 1970 年代以降、海岸側の開発や、集落内に徐々に空き家が増えたことで生垣の消失が進んだ。

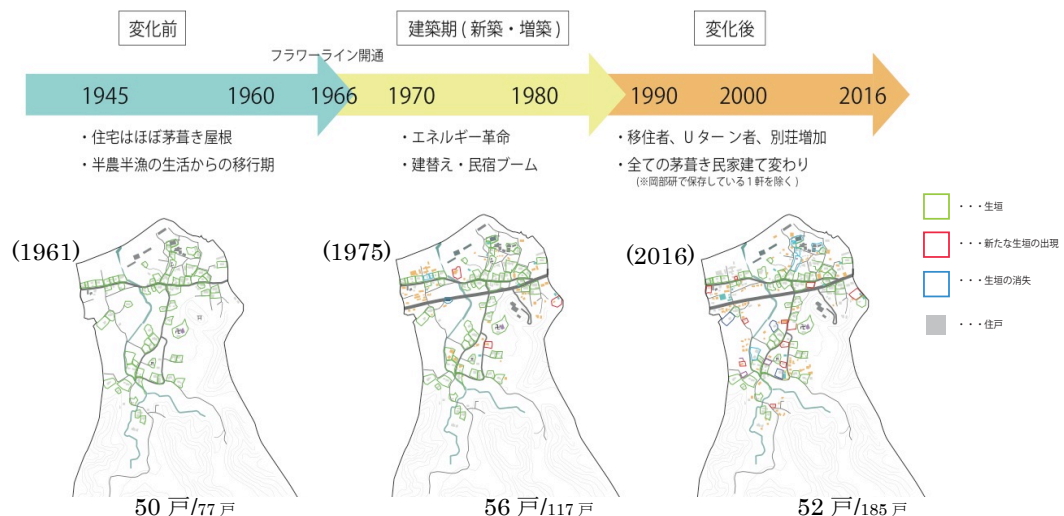


図 4 集落空間の変化と生垣を持つ民家の

一方、新築住宅建設は1960年代以降急増したが、新たに建築された民家のほとんどは生垣を持たず、1960年代には9割近かった生垣のある民家の割合は、2016年には約3割にまで減少した。1970-80年代は塩見集落内で茅葺き民家からの移行や生業の形態にも大きな変化があった時期である。昔からの生垣が比較的に残存している一方で、こうした暮らしの変化が農村景観の存続に大きな影響を与えたことがわかった。

4 暮らしの変化と生垣との関わり

集落空間と生垣の変容を踏まえ、集落に暮らす人々が具体的に暮らしの中でどのように生垣と関わってきたのかを明らかにするため、ヒアリング調査を行った。

4.1. 生垣の機能の代替と喪失

集落内に茅葺き屋根の民家が多かった頃、生垣は防風・防火のために欠かせないものであり、今も防風の為に維持されている。しかし現在はこうした機能の必要は弱まっており、垣根自体が持っていた境界としての機能なども、住宅の増築や土地の売買の過程で失われた。これらの機能の消失は、いずれも1960~80年の間に起こったことがわかった。その頃から急激に生垣の設置が減ったのには、こうした機能の消失が要因として考えられる。

4.2 生垣が維持されている理由

生垣は管理が大変で、それは高齢化していく集落で深刻な問題になりつつある。一方で塩見区では「先祖が残したものだから」「近所にみつともないから」といった理由で、生垣は放置されることなく丁寧に手入れされている。

結論

安房地域においては、人びとがこの地に住み始めて以来、生垣は機能を変化させながら当たり前存在してきた。人がそれぞ

れその土地の自然条件を微細に感じ取り、生垣で家を囲った帰結として、調和のとれた美しいと感じさせる生垣景観、すなわち「生きられた景観」を生んだことがわかった。こうして、世代を超えて続いてきた囲いとしての生垣の連なりが成す農村景観は、その土地の気候風土や集落の成り立ちを知る手がかりを与えるものであり、それを守ろうとする意識につながっている。

また、塩見地区における調査から、1970年代以降が、集落空間にとっても、生垣にとっても大きな転換期だったことがわかった。人と自然との関わりの微細な違いを反映した生垣の個性のみならず、生垣の持つ機能が急速に失われ、その存続が危ぶまれた。しかし、なおも生垣が特徴的な景観を辛うじて維持できているのは、継承すること自体の意味、機能的価値に代わって景観構成要素としての生垣の価値が認識されるようになったことによる。今後、調和の取れた生垣景観を保全していくためには、時代とともに移り変わってきた生垣の価値を共通認識とし、意識的に景観構成要素として生垣を保全しようとする欲求を支援するしくみが求められるのではないかな。

参考文献

- 1) 額田巖(1984):『垣根-ものと人間の文化史』,財団法人法政大学出版局
- 2) 柳井重人 他(1994):千葉市における生垣の分布特性に関する研究
- 3) 近江慶光 他(1992):茨城県取手市における生垣等の囲障実態に関する研究
- 4) 小森美咲 他(2013):屋敷林の変容と民家の空間構成に関する研究
- 5) 樋口忠彦(1993):『日本の景観 ふるさとの原型』,筑摩書房
樋口は、自然に対して受け身で依存的に、自然をうまく利用した環境の改変を行ってきた結果形成された「生きられる景観」こそが「美しい景観」であると述べた。
- 6) 大山勲(2001):伝統的農村集落における道空間の形態とその形成要因に関する研究 -甲府盆地の平坦地に立地する集居農村集落を対象として-
自然発生的集落とは、「無名の民衆の生活が長い時間をかけてつくりあげてきた集落」のこと。
- 7) 『和名類聚抄』(930年頃)
- 8) 『角川日本地名大辞典 12』, 角川書店(1984)